刀劒鑑定秘訣

古刀編

二

67
10
274

今古刀劍鑑定秘訣　卷之三

東山道鍛冶

◎美濃物

美濃物の大體は、大和物と似たり、是れ其の本は、大和より出でたるものなればなり。燒刃は、直刃、足の入りたる亂れ刃等あり地肌は、古作にありては正目もありといへども、後世の作は、大概皆板目なり。志津の一類に至りては沸多く、人々の知らざる末作にも亦甚だ上出來のものなきにあらず。中心の鑢は、ひがき、

明治
38 1 18
交内

鷹の羽多く、又横鎺、小筋違もなきにあらず。先は栗尻多し。千手院物に至りては、全然大和より出でたるものなれば、專ら其の風を模せるものゝごとし。平は横、鎬は筋違もあり。其の鍛冶の如何に拘はらず、切物樋ともに稀なり。鎬の狹き方多し。

◎兼氏

兼氏は、元暦頃の鍛工にして志津の住人なり。其の刀の造り及び棟は種々ありて一樣ならず。庵は中、また立棟もあり。切先の如きも一定せざるがごとし。故に其の樣種々あり。鍛は板目なり。樋もありて能く沸わ、砂流しもあり。亂又は丸き心あり。又亂に玉の燒入りたるものなきにあらず。鋩子は丸き方なり。小脇差の造りは種々あり。是れ亦一樣ならず、大概刀と其の趣を等しくす。時に或ひは直又のものあり。其の大出來なるものに至りては、左文字に紛らはしきものあり。これを要するに、正宗より傳へられし一類は、僅少の部分のために、これが鑑別をなすこと多し。故に充分の注意をなさいれば、大に過つことあり。中心の棟肉、鎺目は、横、ひがきもあり。先は栗尻にするもの多し。兼氏は數世ありて、唯後の志津と唱へ、其の末作は、遙に劣等なり。初世兼氏は、初め大和に住して包氏と云ひ、晩年正宗の門人となれりと云ふ。

◎兼信

兼信は、兼氏の弟子にして直江志津と云ふ。大體は、兼氏の作と異ならず。關風のぐのめ亂れは砂流しのあるもあり。能く沸わたり。他に又直江志津と稱する一類あり。自から別派なり。

◎金重

金重は、正應頃の鍛工にして兼氏の弟子なり。刀の造り種々ありて

一様ならず、庵は中、三つ棟もあり。其の切先のごときも亦種々あり。鍛板目なり。のたれ双、小ぐのめ等に亂る　沸あり。又志津の小出來のごとく見ゆるもあり。鋩子は丸し。小脇差の造りは、幅廣く反りて、直双なり。其の他の點に至りては、刀に於けると異ならず。中心の棟肉、横鑪にして先は栗尻なり。劍形のものばかりとの説あれども信じ難し。

◎金行

金行は、建武頃の刀工にして金重の子なり。其の造りは大體に於いて父の作と異ならず。ぐのめ風に直双雜り、又はのたれ心の亂るゝもなきにあらず。沸は誠に細かなり。

◎爲繼

爲繼は、越中の郷義弘の子にして、則重の弟子なり。太刀、刀は少

なし。小脇差は、其の造り反りて、庵淺く、三つ棟にして亂双、よく沸ゐたり。燒双は、小ぐのめ、直双に小足の入りたるもあり。大概金重に似たり。鋩子は丸くして、勝手下りの鑪目なり。

◎千手院

千手院は、もと大和の鍛工なりしが、後年美濃の關に移れり。數代あり。正應の頃なり。ぐのめ亂れの崩れたるもの多し。大體に於いては關の風ありて。後の志津直江とも云ふべき姿あり。すながしにして双の上木工肌なり。又は皆燒と云ふほど能く沸ゐ、相州物に紛らはしきものあり。中心の鑪目は横にして、鎬は、筋違鑪のもの多くあり。

◎兼吉

兼吉は、康暦頃の鍛工にして、關善定と云ふ。刀の造りは細くして

鎬の幅狹く、鍛正目なり。甚だ細かにして直刄、又は小亂れの雜りたるもあり。少しく沸ゐてぐのめ亂れもあり。鋩子は丸き方なり。

◎兼定

兼定は和泉守と稱す。文龜頃の鍛工なり。大亂刄にして沸よく、匂ひ深し。當時に於いて、兼定に匹敵するものなく、既に名工に數へらる。其の最も良きものに至りては、志津、左文字をも凌ぐものありと云ふ。

◎壽命

壽命は數世相續く。皆天福以來に屬す。初世の作は、沸細かに、地刄ともに白き絲のごとき條なり。鋩子の返り淺く、地藏頭にして直刄のもの多し。又小亂れもありて巧なり。末葉に至るまでも皆同作なり。中心角棟にして、横鑪、先は栗尻なり。又間々大筋違の鑪目もなきにあらず。此の一類にして、忠義、忠依、泉水、國長、國光、兼光、長眞、長廣等多くは同一の作なり。然れども甚だ劣れるものあり。其の他、長廣、長吉、長盛、長守、長勝、正廣、正俊、正吉、正次等を稱して、坂倉と云ふ。

◎兼光

兼光は、大和の鍛工なりしが、後年美濃に移住す。美濃の鍛冶は、概ね其の末流なり。初名包光、後兼光と改めたるものなり。太刀姿は、中心ともに大和物に似たり。大體の刄文は、細直刄又は亂れ刄にして、沸の多きは、流れ刄のものにあり。鋩子は丸く、地藏頭にして返りの深きものもあり。同名數人ありといへども、後の同名は多くはひがき鑪のもの多し。

◎兼元

兼元は、和泉守兼定の一門にして孫六と號す。地鐵細かにして剛く匂ひ深く、沸は至つて細かに、三本杉形の小亂多し。又直及のものもあり。同名數世相次ぐといへども初世のごとく上工ならず。關の七流とて、善定兼吉、奈良太郎兼常、德永兼宣、三阿彌兼高、得印兼久、良賢兼舟、室屋兼在なり。此の七流が、其の末葉諸國に分派し、美濃、越前を始めとし、五畿七道に及びて、數千の劍工、皆、兼の一字を冐す。而して其の作のごときも、此の七流の面影を汲むもの多し

◎近江國

◎有國

有國は、粟田口國家の五男にして、近江國金田に住す。太刀姿細く且つ長くして、鎬狹し。久國、國安に能く似たり。備中物のごとく地に澄みたる肌ありて、色は少しく黑めに青く、双の色白く、少し青き心ありて、國安作の稍位の劣りたるものゝごとし。反高くして庵丘なり。中心棟は肉、横鑪にして先は栗尻なり。銘は目貫穴の上にありて有國と打てり。

◎玉

玉は、粟田口國友の六男にして、近江國勢田に住す。依て勢田六郎と號す。太刀姿は、粟田口一家と異なるところなし。殊に最も能く國清の作に似たり。

◎光包

光包は、中堂來と號す。前編京物の部に詳かなり。

◎俊長

俊長は、天九郎と號す。相州貞宗の近江にある間の弟子なり。此の作は、貞宗の高木に於ける作に似て、沸あらくして賤しき心あり。又來國光に似たる所もあり。銘は、表に俊長、裏に江州甘呂と打てり。

◎有行

有行、有正、重永、百國、南仲、神次、友安、弘光、安行、助長等の作ありといへども、別に記載するの價値なきを以て、唯、其の名のみを顯はし置くのみ。

◎信濃國

◎有常

有常は、同銘二世あり。初世は、其の銘、常の字短く、二世は長し概ね大太刀多し。大亂に沸多く、地鐵甚だ朗にたり。切先は大にして返り深く、樋は、中心の内にて搔き止め、中心の棟は、太刀は小肉、刀は角なり。相摸中心に横鑪は、二世ともに同一なり。

◎丸房

丸房は、長刀の名工なり。大亂、皆燒あり。太刀、刀ともに其の形大なり。太刀は、鉈子一枚にして返り深く、彫物は、梵字、劍等種々あり。中心は反りて棟は小肉、長刀は角棟なり。銘には、信州住丸房作と打てり。其の他有國、國行、助當等、皆其の作を同じくす。

◎上野の國

◎國重

國重は、長谷部の末にして、其の風情、國信などの作に同じきもの

なれども、位は甚だ劣れり。景重、綱重のごときも亦同作なり。中心は丸棟にして横鑪、先は栗尻なり。

◎定慶

定慶は、豐後の行平の子にして、信濃、豐後及び上野の定慶と云へるは、皆同人なりと云ふ。其の作は、大概行平と異なるものなし。中心は角棟にして、鑪目は筋違、先は栗尻なり。銘に豐後國定慶作と打つ。

◎下野國

◎守勝

守勝の作は、備前物に似て其の位劣れり。中心は、鋒元廣しといへども、それより一二寸にして著るしく細くなりて斜になる。棟は小肉にして横鑪、先は栗尻なり。永正前の鍛造にして、裏に草體の倶利加羅龍を鐫しだるものあり。樋は甚だ太し。

◎春盛

春盛は、一門甚だ多し。得次郎村に住す。中心薄く、先丸し。先づ上工なり。其の他、春風、廣宗、武吉、頼光等の作あり。

◎國廣

國廣は、堀河日向と同人にして、暫時此の國に滯留して鍛冶の業に從へりと云ふ。

◎陸奥國

◎森房

森房は、舞草太郎と稱す。太刀の姿幅廣く、丈夫にして反高く、鎬

も亦廣し、鍛細かに、肌甚だ美事なり。直及、亂及一樣ならず。及の中にも肌の見るものなり。恰も伯耆の安綱風情に似たり。鋩子は尖りて、返り深く、彫物は、劍、梵字等あり。樋の掻止は、鎺の下にあり。中心の棟に肉あり。太刀は、小肉にして横鑪、刀は三つ棟の造り多し。劍は獨鈷ありて幅廣し。此の一類は、數十人ありて其の風情皆同じ。

◎友長

友長は、舞草の一門にして、其の太刀姿、中心、鍛、地鐵、沸、匂ひ、肌、鋩子等、皆相似たるものにして、多くは物打の邊にて、深く入りたる刄あり。中心は反り、其の先、一文字のごとくすり下し棟は小肉、鑪目は横なり。

◎近則

近則も亦舞草の一門なり。鍛目は、森房、友長より見るときは細かなり。沸も亦細かにして匂ひ深し。鋩子は、地藏頭にして返り淺く樋は、鎺元にて丸く止めたり。中心は反りて横鑪、先は栗尻なり。

◎光長

光長は、亦舞草の一門なり。太刀姿、地鐵の色、鋩子等其の位近則に同じ。行重、有行、有正等、皆上工にして相似たるものなり。いづれも皆、舞草一類にして、自から其の趣を備へり。

◎寶壽

寶壽は、貞應頃の刀匠なり。太刀姿細きもあり。亦稍太きもあり。刀の造も亦然りとす。小切先にして庵淺く、三つ棟もあり。鍛板目にして肌美し。燒及は、直及、亂及の別あり。信國又は關の風に似て、沸のあるものと無きものとあり。一樣ならず。鋩子は、大抵丸

きもの多きがごとし。彫物は、梵字、鍬形若くは蓮華等なり。長谷部などにも似たるがごとしといへども、其の彫は、すべて巧ならず小脇差の造りは直にして、間々反りたるもなきにあらず。其の他の點に至りては、刀と異なるところなし。中心の棟は肉、鑢目は横のもの多く、先は栗尻なり。

◎出羽國

◎月山

月山の刀姿は、大ならず又小ならず、其の中位を得て、恰好善し。小切先なり。樋もあり。庵は中にして地肌は文杉なり。是れ刀劍鑑定家の最も普通に知悉するところなり。肌われの多くあるものにして、又間々例の肌なきものもなきにあらず。又此の外の作に、此の

肌の無きものもありとす。詳細は、後編押形の部に就て見るべし。多くは直刀にして小亂刀のものもあり。鉋子は、總て丸き方なり。小脇差の造は、種々ありて一定ならず。其の形態は、概ね刀に於けるものと異ならず。又中脇差もありて同じき鍛なり。中心の棟は、角及び丸きもありて一樣ならず。鑢目は、横又は小筋違もあり。先は栗尻にして刀の方は上れり。

◎俊恒

俊恒の太刀姿は、反高くして其の鍛甚だ丈夫に見ゆ。鍛板目にして直刀多く、亂刀は甚だ稀なり。地鐵青くして細かに、沸は小にして匂ひ深し。鉋子は稍尖りて剛く、且つ返り深し。

◎長久

長久の鍛は、總て俊恒と異ならざるもの多し。其の一斑を擧げんに

直又は、眞に巧にして沸多く、且つ匂ひ深し。鋩子は杉形にして返り深く、樋を掻きたるもあり。刀のふくら及廣く、中心は反りて、棟は角なり。太刀には鎺元に肉あり。横鑢、栗尻にして通常なり。其の他、鬼王丸といへる作あり。傳ふる所に依れば、森房の子なりと云ひ、又は初代月山の子、或ひは友長と同人なりと云ふ。其の作を見るに、鎺元以上は、すべて月山に異なるところなしといへども中心は、角棟小肉にして、先は栗尻のもの多きがごとし。

◉行恒

行恒の太刀の姿は、鍛其の他月山に異ならず。地鐵冴ねて樋あり。概ね鎺の元に掻き止むるなり。中心は反りて角棟なり。鑢目は横にして先は栗尻なり。

第五編　北陸道鍛冶

◉北國物

北陸道諸國の鍛冶を總稱して、これを北國物と云ふ。其の大體に於いては、敢て大差なし。多くは沸深く、砂流しの心ありてはきかけ外の諸國と異なりて賤しきがごとし。而して其の位品に乏しく然れども鄕義弘の作に成れるものゝごときは、流石は正宗隨一の門人たるに愧ぢず、其の名工巨匠の面影、實に感嘆に堪へざるなり。以下例に依りて其の詳細を說かん。

◉若狹國

◎冬廣

冬廣は、康正頃の鍛刀匠なり。刀姿は先づ大體に於いて善し。庵は中位にして三つ棟のもの多し。又樋を掻きたるもなきにあらず。切先は中にして木工肌あるもあり。又頗る美しきものもあり。燒刃はのたれ又、直又、のたれ亂れ、ぐのめ風の亂等種々のものあり。又間々大出來なるもあり。廣きものもあり。沸なくして堅きも、又は能く沸ゐたるもあり。匂ひ深く、若くは打のけのあるもあり。小脇差の造りに至りては、其の作種々ありて一樣ならず。中脇差もあり て、其の作、概ね刀と異ならず。中心棟も亦種々あり。横鑪、筋違鑪あり。先は栗尻にして相州廣次三世の作に髣髴たり。同名數代ありと雖も、初世の作は、最も優れりとす。

◎宗長

初世宗長の太刀姿は反りて、鍛こまやかに、直又にして實に麗しく能く沸ゐ、匂ひ深し。鋩子は尖りて、返り深きもの多し。樋は、栗尻に至りて掻き止まるもの多く、中心は角棟にして栗尻なり。鑪目は横のもの多し。銘は、目貫穴へ掛けて、若州小濱住宗長と打てり二世宗長は、又に小足を燒入れたるもの多し。其の中心は、父と同じく備中物に似たり。其の他、宗清、宗次、宗吉等皆同じき同情にして、宗吉は、同名三世に及べりと云ふ。宗吉の銘は、若州住宗吉又は單に宗吉とあり。宗次の中心は、小肉棟にして稍劍形の先なり。

◎越前國

◎國長

國長は、金津權三と號す。太刀姿反りて、鎬高く、鍛細かに、亂又

多し。二世は、直双のもの多くして、鋩子は杉形、返り深く棟焼なり。一類は、いづれも皆大同小異なり。盛重、行眞、宗光、國重、國秀、國行、宗吉、信長、吉則等のごとき、皆上工と稱すべし。盛重は、棟角且つ小肉にして平横鑪、越州敦賀住盛重作と打ち、宗光は、角棟小肉にして先は劍形をなし、越前國住左兵衛尉宗光と打ち信長は、横鑪にして角棟、先は劍形なり。行眞は、小筋違鑪にして棟は小肉、先は劍形なり。而して通稱掃部二郎と號す。

◎國安

國安は、應永頃の鍛工にして、越前來千代鶴と號せり。太刀の姿幅廣く、重なりといへども薄く、庵深くして、三つ棟、丸棟もあり。鍛正目にして肌こまやかにして、一見麗しきがごとしといへども、勝れざるを以て、地にねばき鐵の出づるがごとし。直双又はぐのめくに逆亂のものもあり。鋩子は杉形にして、返り深く。大沸ありて地も鋩子もこぼれたり。又棟焼のものもあり。又ぶちは木工立のもの多し。中心は、長くして細く、且つ角棟なり。太刀の中心は、其の先を一文字に摺りて、両の角は丸く摺れり。刀は、劍、梵字、香足の彫物なり。恰も來國光の沸の粗きがごとく、能く似たり。小脇差の鍛造は、刀と同じき鍛なり。中心の棟は角にして鑪目は大筋違なり。銘は、來國安、國安、越州國安、又は表に國安、裏に千代鶴と打てるものあり。

◎守弘

守弘は、應永頃の刀工にして國安の弟子なり。刀姿幅廣き方にしてのたれ又、飛びたる双もあり。中心は棟丸く、又角棟もあり。横鑪にして先は劍形なり。多くは守弘の二字を銘す。其の他、家安、家

吉、家正、家善、森弘、森宗、廣家、有俊、性佛等のごときは、皆國安の風情あり。又兼則、兼法、兼植、兼常、兼中、兼正、兼高、兼定、兼家、兼重、包廣、包則等のごときは、慶長以前より數世連綿して用ゐべき上作のもの少なからず。其の中心のごときは、森弘は、棟角小肉にして筋違鑢、先は劍形なり。森弘と銘す。守重は、是亦小角棟にして横鑢のもの多く、先は栗尻なり。

◉加賀國

◉眞景

眞景は、建武頃の鍛工にして則重の弟子なり。刀の作は甚だ稀なり小脇差の造りは反りたるもの多く、庵中、三つ棟もあり。燒刃は、ぐのめ亂れ又はのたれ亂もあり。又間々直刃のものもなきにあらず時に或ひは藤島に似たるもあり。鋩子は丸くして返り深し。中心の棟は角にして、鑢目は横なり。又筋違もあり。先は栗尻にして、銘は、唯藤原と打てり。もとは越中の人なれども、移りて加賀に住し後又伯耆に住し。老後越後に住せり。而して其の住地ごとに於いて鍛冶の術に從ひたるを以て、國を異にするごとに別人のごとく思ふものあらん。然れども以上の事實なるを以て、別人と誤ることなかれ。

◉友重

友重は、嘉暦頃の鍛工にして來國俊の弟子なり。加賀藤島に住す。本國は越前なり。太刀姿幅狹く、恰も備前物に似て、鍛こまやかに小亂刃の模樣等は、備前と關とを兼ねたるものに似たり。鋩子横手筋へ下りて、一重も燒きたるもの多く、返りは深し。刀は、鎬狹く

庵中にして淺きも三つ棟もありて、小切先なり。燒刃は、ぐのめに丸き亂刃あり。又亂れ崩れたるもあり。其の他、直刃、二重刃もなきにあらずといへども頗る稀なり。然れども美事に鍛ひたるものは百中僅に三四に過ぎずと云ふ。是亦關とも備前とも見る鍛多し。鋩子は丸きも崩れたるもあり。小脇差の造は種々ありて一定せず。略刀の鍛方と同じきなり。又中脇差もあり。其の鍛小脇差に異ならず中心の棟は角、又は小肉あり。鑢目は勝手下り、横等あり。先は概ね劍形にして、双の方より取りたるものなり。銘は、藤島友重、又は藤鴻若くは藤搗友重と打てるものあり。

其の他行光、景光、信國、國次、近則、信光、光則、長氏、有綱、家政、家永、家正、家長、是重、定次等のごとき、いづれも皆友重と大同小異なり。而して友重、行光、清家、家次は、數世同銘のものあれども、少しく位に甲乙の別あるのみ。清光は世々直刃のもの多く、勝家の末葉勝國は、備前一文字末の小亂刃ありて、殊に勝れたり。尚ほ其の他藤島の一門に是光、守弘、光長、友清、友次、清行、廣家、吉次、重信、正清、友長、友家、包長、家俊、盛光、清重等の鍛工あり。友信の作は、樋を掻きて先に至れり。小肉棟にして先は摺りて一文字の形をなせり。横鑢にして加賀國友信作と銘す友信なるもの古書の系圖に見る所なければ、友重の一門ならんか天文弘治の人か。行光の作は、角棟小肉にして太き樋を掻けり。先は劍形にして横鑢なり。加州藤原行光と銘す。又角棟、横鑢、筋違鑢にして先の劍形若くは栗尻なるもあり。景光の作は、角棟にして横鑢、銘に賀州住景光と打つ。家次の作は、角棟にして横鑢、先は栗尻なり。棟に寄りたる方に、加州藤原朝臣家次作と銘せり。又加

州藤原住家次作と打てるもあり。家政の作は、角棟にして横鑪、先は栗尻なり。銘は、加州藤原家政と打てり。

◉能登國

◉國長

國長は、其の鍛冶中島來のごとしといへども及ばず。銘は、表に國長、裏に能州笠師と打てり。其の他重國、定弘等の鍛刀工ありといへども、其の作少なし。

◉越中國

◉義弘

義弘は、松倉の鍛工にして建武頃の人なり。其の太刀姿長くして反り、鎬少しく廣く、庵深し。樋もあり。切先少し伸びたり。又小切先もなきにあらず。鍛板目、肌いかにも細かにして美きものなり。燒刃は、のたれ亂刃廣くして大出來なり。沸こまやかに多く、匂ひ深し。元に必ず匂ひを燒くことあり。横手下りあたり亂刃ひろく、鋩子丸く、返り深きもありとす。又直刃のごとくにして、亂れ雜り美しきもあり。もと正宗の弟子にして、出藍の譽あるを以て、殆ど同樣の目利をなすものなきにあらざるなり。尤も此の人の作は、動もすれば正宗よりも勝れたるものなきにあらずして、世の珍重する所なり。此のごとき作に至りては、如何にも細かにして、むつくりとしたる鍛なり。小脇差は甚だ稀なり。其の造り直にして、稀には少しく反りたるもなきにあらず。三つ棟もあり。廣直刃の中沸にて刃の内亂れなり。鋩子は、少し尖りて返り深し。中心の棟は、少し

く角なり。鑢目は筋違又は横にして、先は劍形なり。太刀、刀、小脇差の内にては少しく淺く、多くは無銘なり。鎌倉に住して打つを鎌倉郷と云ふ。是れ正宗の門人たる時に於ける作なり。銘は、義弘義廣（鎌倉にての作なり）越中國住人義弘、又は郷と打つもの多し。

◎爲繼

爲繼は、義弘の門人なり。其の鍛冶の姿義弘に似て、甚だ巧なもの多し。故に其の無銘のものに至りては、義弘に紛るゝもの少なからず。其の樋あるものは、鎬の下にて撫き止むるもの多きがごとし。其の他の點に至りては義弘の作に類するもの少なからず。中心は小肉棟にて、横鑢、先は概ね栗尻なり。銘には、爲繼作とあるもの多し。

◎則重

則重の太刀姿は、反ありて恰も相州物に似たり。地鐵こまやかに冴

れて、直刃の中に、沸と匂ひとにてみだるゝなり。又地刃の中に白髪木工ありて麗し。而して鋩子は尖り、其の白髪木工にて包みたるがごとし。刀は三つ棟又樋を搔きたるもなきにあらず。中心の棟は小肉にして鑢目は横、先は栗尻なり。銘は則重と打てり。

◎貞景

貞景は、則重の門人なり。其の鍛冶の姿は、すべて則重と等しく、位の稍劣れるのみ。

◎利重

利重は正宗の門人なり。其の鍛冶の姿は、義弘、則重に同じく、位少しく劣れり

◎重國

重國は、則重の門人なり。能登の國に同銘あり。或ひは其の人を同

じうするにあらずや。其の銘を見るに、恰も同一の手に成りたるが如し。

◎國光

國光は、大和國宇多の鍛冶にして、越中に移り、冶刀の業に從ひしが、一族多く、皆宇多と稱す。太刀の姿は、備前物に類し、大和に於ける作には、直及のもの多く、越中に來りてよりは小亂及のもの多し。沸多く、匂ひ深し。則重の門人となりしと云ふ。又或ひは國光の次男、國房は、則重の弟子となりしとかや。銘は宇多國光、又は國光と打つ。中心は角棟又は小肉にして横鑪又は筋違なり。先は皆栗尻なり。

◎國宗

國宗は、大和に於ける國光の子なり。直及の名手なり。又小亂及には皆燒もなきにあらず。中心の末おくれて、甚だ細く、棟及び先ともに丸く、横鑪なり。

◎宇津

國次、國房、國守、國安、國賢、友國等のごときは、皆宇津の一類にして刀の姿は種々あり。又切先のごときも一樣ならず。樋もあり庇淺く、三つ棟もなきにあらざるなり。直及、亂及種々あり。大山來にして木工砂流し、稻妻等の類ありて、いづれも皆麗しきもの多し。鋩子は丸きもあり、亂れ崩るゝもありて、其の最も良きものに至りては、相州物と紛らはしきものあり。其の他木工立、直及は、多きがごとし。又新身を見るがごとくなる出來もあり。いづれも其の冶工によりて一樣ならざれども、總て及の上は砂流し心に木工立も多し。小脇差の作は、是亦一樣ならず。中脇差もあり。いづれも

刀と異なる點少なし。中心の棟丸きもあり、横鑢のもの多く。先は栗尻なり。中心深きもの多く。銘の國字は國となしたるもの多し。其の他友則、友次、友久、友行、友光等のごときあり。然れども是等の作は、世に多からざるを以て、見し人稀なりと云ふ。

◉越後國

◉安信

安信は、太刀及び刀の姿は、京師の信國に似たりといへども、太刀は甚だ稀なり。鍛は細かにして地鐵青く、直刄のもの多し。沸細かに、匂ひ深く、鋩子は杉形にして返り深し。彫物は信國の作のごとく、劍は、必ず獨鈷あるべし。中心の姿も亦信國に似て、先細く、棟に肉あり。刄刄の方にも肉ありて、鑢目は、筋違及び横あり。

正信二代同銘、以上三代は、皆後に信國と稱す。且つ其の名を銘に打てり。故に越後の信國と號す。信重、行光、重信、正信等のごときも亦信國と稱せり。信重の作は、中心小肉棟にして横鑢、先は栗尻にして山村信重の銘あり。正信の作は、中心は角棟にして筋違鑢先は栗尻なり。正信作と銘す。

◉長義

長義は、備前の同人なりと云ふ。或ひは然らん。又云ふ秦と稱すと詳細は備前の部に記載す。

◉信長其の他

信長は、安信の子、俊長は、近江の同人とも云ふ。吉次、繼吉は、桃川の住人なり。春日山の兼辰は、天文弘治頃の冶工なり。信長の中心は、小肉角棟にして筋違鑢、先は栗尻にして信長の二字を銘す。

◎佐渡國

佐渡には、吉恒と稱する冶工あり。其の作多からざるを以て、單に其の名を知らるゝのみ。未だ其の如何を見ざれば揭ぐること能はざるなり。

第六編　山陽道鍛冶（上）

◎播摩國

◎安頼

安頼は、もと大和の鍛工たりしが、中頃播摩に來たりて冶刀の業に從事したりと云ふ。然れども其の太刀姿は、備前の助平、包平等の

作の風情ありて、地鐵は、少しく白け、刃色白くして冴え、沸多くして匂ひ深し。古代の上工として其の名の著はれし所なり。中心は角棟にして横鑢、先は栗尻なり。安頼と銘す。其の他、角國、國眞國吉、近包、家時以下一門甚だ多し。然れども其の作の大體に於いては異ならず。稍劣れるのみ。角國の作は、中心小肉棟にして鑢目は筋違、先は栗尻なり。而して中心の中途より其の先に至るまで、細く削りたるがごときものあり。包重の作は、角小肉にして筋違鑢先は栗尻なり。包吉、國吉、國吉、行宗等皆同じ。而して其の銘は、皆二字を鐫す。吉長は、中心丸棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。銘は、表に播州明石住吉長、裏に元龜と鐫す。

◎美作國

◎朝忠

朝忠は、備前の刀工なり。美作に來たりて堀坂に住す。太刀の姿恰も備前物に髣髴たり。或人曰く、二十四人中十月の番鍛冶なりと。中心は小肉棟にして筋違鑪、先は栗尻にして摺付けたり。

◎忠貞及び其の他

忠貞、秀貞、秀綱、貞經、則房、元信、實經、實行、景行、宗行、景介等の刀工ありといへども、皆備前の同人なるべし。又別に國光といへるあり。上工なり。或人曰く、元信は、美作國河邊元信と銘すと。又曰く實行は、石貫の住人にして實經の子、後に貞經とも改めたりと。景行の作は、中心小肉棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。景行の二字を銘す。貞綱及び景介は、中心小肉棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。各々二字の銘なり。秀貞の中心は、貞綱と異ならずといへども、銘は美作國秀貞と打てり。國光の中心は、小肉棟にして筋違鑪、先は劍形なり。國光の二字を銘す。

◎備前國

備前物の大體に就いて、茲にこれを略述せんも。古備前と云へるは、元暦以前のことにして、其の太刀姿は、總體ふんばり强く、腰元反り高く、庵深く、又は中なり。鍛正目、若くは板目木工肌あり。殊に古備前物に至りては、多くは丸鍛なり。沸は誠に細かにして、粗きものはなし。すべて沸すくなくして、匂ひは深きもの多し。

燒刃は、亂刃、丁子刃若くは直刃に足の入りたるもあり。動もすれば京物に紛れやすきものあり。然れども京物は能く沸ゐ、棟燒

もあり。備前物のごとく反の高からざるものなれば、是等は、先づ著るしき相違の點ならん。又一文字の一門、來國行、國俊又は定利の類に能く似たり。古備前にありては粟田口物に能く似たるものも少なからず。足もなくして普通の直刄は、甚だ稀なり。鉈子は、大概尖りて、返りの少なきもの多し。又丸きものもなきにあらずと雖も稀なり。

彫物は、すべてかじけたるが多し。倶利加羅、劍等ありて、鎬の中、幅狹く彫りたるもの多し。梵字のものは、手際宜しからず。大體に於いては、取しまりなきがごとく、長短くして尖れり。樋はすべて淺く、小切先まで搔き通して、其の先は、恰も小切先のごとし。又添樋あるもの少なからずして中心までも搔き通したるものあり。寶治の頃よりは、樋は太くして淺く、丸く止めたるものもあり。又劍に中鎬を立て、三鈷つかの鑚を深く彫るもあり。末の作に至りては、沸たるも、沸のなきもあり。地刄ともに木工立ちたるものもあれども、其の出來は、甚だいやしくして、如何にも備前物と見ゆるもの多し。又末の關の鍛冶にあらずやと疑はるゝものもなきにあらざるなり。棟燒のあるもの稀なれども、末の備前にはこれあるもなきにあらず。總じて備前物には、刄のうつりのごときもの、地に見ゆるものなり。殊に兼光のごときに於いて最も然りとす。地鐵は、備前肌と唱へて、木工肌のあらはれ鐵のあまき心あり。

小脇差の造りは、其の作の如何によりて種々ありといへども。古備前及び一文字の一類にはあることなし。

中心は、概ね筋違鑢にして、間々横鑢もなきにあらずといへども

是は多くは古備前又は古き一文字の内なりとす。概ね先は栗尻なり。棟は、角も丸きもあり。尚ほ詳密に知らんと欲せば、後編なる圖説に就いてこれを觀るべし。

◎助平

助平は、永延頃の刀工にして古備前と稱せらるゝ一人なり。太刀姿細くして長し。庵は中、鍛正目にして能く沸るなり。鋒元に於いて筋違肌のものあり。亂双の最も上工とする所なり。又大ふさなる丁子双もあり。双の有樣は、則宗の作に能く似たり。又雲次などに似たるものもなきにあらず。直双の小亂雜りもなきにあらず。切先はつゝまやかに燒きつめたり。中心は小肉、横鑢にして先は、劍形、又は栗尻の摺下したるが如きなり。同銘二代あり。初代の作は勝れたり。銘は、備前國助平と打てり。間々平の字を平と打てるものあり。又一説に、基平とも打てりと云ふ。

◎包平

包平は、永延頃の鍛工にして古備前の一人なり。太刀姿庵棟中にして小切先なり。鍛正目にして肌細かに、廣き樋もあり。小亂双、直双又は直双に小亂の雜りたるもあり。よく沸て、双ぶちは木工、稻妻、打よけもあり。其の鍛方甚だ鮮かなるもあり。又沈みて見やるもあり。亂双木工立にして大出來なるもあり。其の鋒元筋違肌のものあり。鋩子丸くして燒き詰めたるもの多きが如し。中心の棟肉、鑢目は横にして先は栗尻なり。後年河内の國に住して鍛冶の術に從ひたり。然れども是は別人なりとの說あれども、恐くは誤りならん銘には、包平、又は備前國包平若くは備前國包平作と打てるものあり。

是は多くは古備前又は古き一文字の内なりとす。概ね先は栗尻なり。棟は、角も丸きもあり。尙ほ詳密に知らんと欲せば、後編なる圖說に就いてこれを觀るべし。

◎助平

助平は、永延頃の刀工にして古備前と稱せらるゝ一人なり。太刀姿細くして長し。庵は中、鍛正目にして能く沸るなり。鋩元に於いて筋違肌のものあり。亂双の最も上工とする所なり。又大ふさなる丁子双もあり。双の有樣は、則宗の作に能く似たり。又雲次などに似たるものもなきにあらず。直双の小亂雜りもなきにあらず。切先はつゝまやかに燒きつめたり。中心は小肉、横鑢にして先は、劍形、又は栗尻の摺下したるが如きなり。同銘二代あり。初代の作は勝れたり。銘は、備前國助平と打てり。間々平の字を手と打てるものあり。又一說に、基平とも打てりと云ふ。

◎包平

包平は、永延頃の鍛工にして古備前の一人なり。太刀姿庵棟中にして小切先なり。鍛正目にして肌細かに、廣き樋もあり。小亂双、直双又は直双に小亂の雜りたるもあり。よく沸て、双ぶちは木工、稻妻、打よけもあり。其の鍛方甚だ鮮かなるもあり。又沈みて見ゆるもあり。亂双木工立にして大出來なるもあり。其の鋩元筋違肌のものあり。鉋子丸くして燒き詰めたるもの多きが如し。中心の棟肉、鑢目は横にして先は栗尻なり。後年河内の國に住して鍛冶の術に從ひたり。然れども是は別人なりとの說あれども、恐くは誤りならん銘には、包平、又は備前國包平若くは備前國包平作と打てるものあり。

◎助包

助包は、永延頃の鍛工にして古備前の一人なり。太刀姿細くして長し。庵淺くして鍛正目。樋を掻きたるもあり。小切先なり。燒刄は小亂刄、刄は直刄に鼠足の入りたるもなきにあらず。刄大出來に亂れたるもあり。刄玉などありて能く沸たるものもなきにあらず。鋩子は、總て丸し。中心の棟は丸く、鑪目は中筋違にして、先は栗尻なり。同名のもの一文字の内にありといへども、其の作劣れり。銘は、備前國助包作又は作の一字を缺ぎたるもあり。

◎高平

高平は、古備前の一人なり。太刀姿幅狹く、重も厚からず。鋼元少しく張りて、横手にて幅重とも少しくおくるゝ心なり。鋩子も、小棟に於いて庵淺き方なり。鍛板目に細く、色青く、刄色白く、地刄

ともに勇々しくして、小沸多くして見分けがたし。大のたれに刄界の匂ひ殊に深く、其の麗しきこと喩ふべからず。先人嘗て曰く、中心、先、鑪目は一定したるものなしと。然れども多くは角棟にして小肉、先に至るに從ひ、次第に薄し。銘は、備前國高平と打てり。

◎信房

信房は、永延頃の刀匠にして古備前の一人なり。刀姿幅廣き方にあらず。小切先にして肌は板目なり。沸多く、のたれ及に丁子刄の入雜りたる燒刄なり。大亂のごときものは更になし。太刀姿は、助包に似て、地鐵細かに、沸多く、大のたれ、小亂、小丁子の足雜り等にして、大亂のごとき、これなきにあらずといへども、最も稀なるものなり。同名二代なり。中心の棟肉、鑪目は筋違にして其の先次第に細く栗尻なり。銘は、一字のものゝみ。二代は稍劣れり。

◎友成

友成は、永延頃の鍛工なり。是れ亦古備前の一人とす。太刀姿細くして長く、庵淺くして丸棟もあり。小切先樋の廣きもあり。又木工肌あり。燒刃は、小亂に小足の入りたるもの多し。地鐵の照り、小沸移りて、霜に旭日の映ずるがごとく、匂ひ頗る深く、其の麗しきこと恰も玉のごとし。又逆刃又は直刃に小足の入りたるも、小のたれ、若くは丁子刃なるもあり。鋩子は丸きもの多し。中心棟丸く、鑢目は、横又は筋違にして、先は栗尻なり。銘は、表に君萬歳、裏に備前國友成と打てり。此の銘あるものは將軍御成のとき、初獻に用ゐらるゝところなりとかや。其の他、友成、又は備前國友成とも打つものあり。隱名は、應保と打てり。同銘三人ありと云ふ。然れども此の友成に及ぶものなし。

◎吉包

吉包は、長曆頃の刀工なり。太刀姿は、甚だ丈夫なる方とす。庵淺く、づんぐりとして小切先なり。肌あり。燒刃は、直刃、廣直刃まじりて、小亂刃なり。又は丁子刃もなきにあらず。刃は、堅きがごとくに見受けらるゝもの多し。鋩子は、少し返りたるも、亂るゝもあり。中心棟肉にして鑢目は種々ありて一樣ならず。先は栗尻なり。銘は大概二字なり。

◎正恒

正恒は、永延頃の刀工にして古備前の一人なり。其の太刀姿は、細くして長く、鎬造り多し。庵淺く、鍛正目、細かに麗し。小切先なり。燒刃は、小亂、丁子雜り。又は大ぶさなる丁子の地へ亂入りたるものもあり。又大出來なるもなきにあらず。又は間々逆亂もあり

足ふかく亂れて、湯走りあること實に美し。是れ初代の作に見るところなり。二代目は鋒元に色變りの双あり。三代目もありといへども、漸次劣れるものゝごとし。而して二代目は小亂刄多く、三代目は、元に小亂刄ありて。中程より上は廣直双にして二字國俊の作のごとくなるもありと云ふ。中心は、初代正恒は、棟角にして肉、筋違鑪にして先は一文字、且つ肉あり。其の子正恒は、棟小肉にして筋違鑪、先は栗尻なり。有正の子にして後の正恒と云へるものゝ作は、角棟肉あり。先は棟の方によりて稍劍形をなせり。又異の正恒といへるあり。其の作の中心は、角棟肉、横鑪にして先うすし。尙ほ外に一人、異の正恒と云へるものあり。棟刄肉、筋違鑪にして先は栗尻なり。又備中の正恒と云へるあり。中心は大筋違鑪にして棟刄肉なり。先は劍形なり。又紀正恒と云へるあり。以上七人の作を稱して、七種正恒と云ふ。而して又五種正恒の呼稱あり。即ち備中及び紀正恒の両人を除きたるものを云ふ。紀正恒は、筑紫の人なり。

一文字の大體は、其の作、太刀刀の大なるもの少なし。庵棟淺く大略鎬作りなり。小切先にして丁子刄亂、匂ひ深く、沸少なし。逆亂にして大出來又は小出來のものあり。鉋子は丸くして棟燒たるもあり。中心の棟は肉ありて、鑪目は横、筋違なり。先は栗尻とす。世に所謂菊の御作と唱ふるものは、一文字の祖則宗の作にして、其の最も勝れたるものには、菊の紋章を彫らせたまへり。則宗を銘あるものには、菊の彫りなし。又特に優りし作には、枝菊を彫らせらるゝとぞ。而して斯道の隨一たりとの御賞詞を賜はり、且つ一文字を下賜せられたるものなり。是れ所謂菊一文字たる所以なり。嫡子助宗以下、一門の末流、皆此の一文字を稱し、

其の數甚だ多し。此の父子兄弟の作は、いづれも佳良ならざるはなし。其の他に至りては、甲乙ありて一定せず。又六一文字と云へるあり。即ち助則、助茂、助房、助吉、則房、吉房の六人を云ふ。助宗は、大一文字と號す。則宗に一文字を下賜せられてより自己は菊のみを彫り、菊なきは實名を鐫したるを以て、助宗は、一文字を彫りし首にや、これを稱して大一文字とは云ふなり。吉岡一文字は、吉岡に住せる一文字派なり。其の鍛冶の姿は、大體に於いて、前記の一文字に異ならず。樋もあり。切先の少しく伸びたるもあり。庵少しく深く、亂刃にして一文字よりは匂ひ少なく、位悪き方なり。鑢目は大筋違なり。

◎則宗

則宗は、元暦頃の鍛工にして、二月の番鍛冶なり。太刀の姿細く、鎬は少しく廣き方にして、庵淺く、小切先にして鍛正目肌細かにして美し。地鐵は細かにして青く、刃は、浮きやかにして白し。其の刃文は、丁子刃、小亂に逆足の入りたるもの、又は打ちのけもあり又先にて刃の廣きもなきにあらず。能く沸に、匂ひ深し。中心の棟は、肉、又は小肉なり。鑢目は、大筋違、中筋違等ありて、先は細く栗尻なり。御番に當りしとき、鍛ひたる太刀は私の銘を、中心の先へ下げて打つ。上に十六菊の菊花を切り、又一文字をも打つことあり。其の他、長船に一文字の銘を打つものあり。其の作を見るに腰元は中亂れ刃、先は廣直刃にして、正目は甚だ細かなり。一見して正恒と紛らはしき嫌あり。尚ほ此の外に同銘のものありと云ふ。

◎助宗

助宗は、九月の番鍛冶にして元暦頃の人なり。其の太刀姿幅廣く、

切先伸びたり。庵は中にして銘を打ちたる太刀は、其の形細し。其の姿及び刄は、二字國俊に似たり。鍛正目こまやかにして、のたれ刄下り足に燒きみだるゝもの多し。又腰刄なるもありて、先は能く沸たり。中心の棟は、肉の高きもあり、又小肉もあり。鑢目は筋違にして先は栗尻なり。銘は、助宗、又は備前國助宗と切るもあり。其の他、菊花をも切り、又一文字をも切りたり。

◎安則

安則は、則宗の子なり。太刀姿細く、反高し。鎬狹く、庵深し。鍛正目にして肌は如何にも細かなり。小亂刄にして沸あり。其の大體に於いては則宗に似たりといへども、遙に劣れり。中心は肉棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。

◎助成

助成は、元暦頃の鍛工にして、十一月の番鍛冶なり。太刀姿少しく幅狹く、庵中にして鍛正目なり。燒刄は助宗の作に似たり。然れども出來は淺き心なり。中心は小肉棟、角棟ありて筋違鑢なり。先は劍形にして二字の銘なり。初めものには助重と打つものあり。

◎助延

助延は、元暦頃の鍛工にして十二月の番鍛冶なり。太刀姿細く、鍛正目にして細かなり。小亂刄又は丁子を細かに燒きたるもあり。沸ありて匂ひ深く、大體は尋常なり。

◎延房

延房は、元暦頃の鍛工にして三月の番鍛冶なり。太刀姿細く、鎬少しく高く、庵中、鍛正目なり。丁子刄大ふさに亂れたるもあり。又小亂刄もなきにあらず。沸細かにして匂ひ深し。中心の棟は丸く、

鑪目は、横または筋違なり。先は栗尻なり。

◎信房

信房は、元暦頃の刀匠にして、番鍛冶奉行たり。太刀姿少し薄といへども、大體に於いては丈夫なるがごとし。鋒元は、頗るふんばり強く、庵深く、鍛正目なり。然れども少しく木工肌のあるがごとく小切先なり。双細きもあり。双は上にて小出來に廣きもあり。双丁子双もありて則宗に似たるもあり。又色は青みありて白けたり。地色は、稍黒めにして青し。鋩子は丸く、双燒き詰めたるもあり。而して其の肉にて亂るゝがごとくに歸りを燒きたり。中心の棟は丸くして、鑪目は、横、大筋違、小筋違もあり。先は栗尻にして信房作又は作の字を除きたる二字銘を打てり。

◎信正

信正は、信房の子にして貞應頃の鍛工なり。太刀姿細くして父の作と能く似たり。重ねも少しく薄く、鎬高く、庵深く、鍛正目なり。燒双は、亂双にして甚だ巧なり。又先の双を燒き詰め、少しく返りたるもあり。中心の棟は丸く、横鑪にして先は栗尻なり。

◎宗吉

宗吉は、元暦頃の鍛工にして七月の番鍛冶なり。太刀姿幅狹く、庵淺く、小切先にして鍛正目こまやかに、且つ大に麗しきものなり。小亂双又は丁子双に玉を燒くもあり。沸ありて匂ひ深く、鋩子は丸し。中心の棟は丸く、鑪目は、横、小筋違又は大筋違もあり。先は栗尻にして太し。

◎吉宗

吉宗は、宗吉の子にして元仁頃の刀匠なり。刀姿の大體は、父宗吉

に似たり。双の上にしみたるものなり。

◎吉用

吉用は、助吉の子にして元仁頃の刀匠なり。刀姿の大體は、宗吉に似たり。然れども花やかなり。直双、又は直双に足の入りたるものあり。

◎吉家

吉家は、建暦頃の鍛工にして宗吉の子なり。太刀姿細くして庵は中鍛正目こまやかにして木工肌あり。切先つゞまやかなり。丁子双の名手にして、上にて双の廣きもあり。ちけいあり。其の大體の姿は則宗に髣髴たり。三條吉家と其の人を同じうすといへる説あれども是は附會の説にして取るに足らざるなり。然れども其の鍛冶の模樣中心及び銘のごときは、頗る紛らはしき點なきにあらず。是れ此の

説の由りて起りし所以ならん。備前吉家は、銘を鎬の内に、吉家造と打ち、中心の鑪目は筋違なれども、三條吉家は、平へかけて吉家作と打ち、且つ横鑪なり。よく沸て元の双廣し。

◎吉平

吉平は、吉家の子にして天福頃の刀工なり。太刀姿反りて高く、鎬も亦高し。且つ廣く丈夫にして庵淺く、切先つゞまやかに、鍛正目甚だ美し。地色は、底赤く見えて上面は黒し。丁子双の出來淺く、匂ひ深し。先双の廣きもあり。双守家の作に似たるもあり。腰双なるもあり、うつりの如くに燒き出して見別けがたきもあり、又甚だ能く現はるゝもあり。鋩子は丸し。中心棟肉　鑪目は横又は筋違もあり。先は栗尻なり。

◎吉元

吉元は、吉房の子にして弘安頃の刀工なり。太刀姿は、幅ありて鎬廣く、切先つゝまやかにして、鍛正目なれども肌ありて白みたるものゝごとし。丁子双大ぶさに逆亂其の先の尖るものあり。又玉焼もあり。地双ともに鍛に木工の出づるあり。匂ひ深く、沸なし。鋩子は、焼き詰めたるもあり。中心肉棟にして鑪目は大筋違、先は栗尻なり。刀の姿いやしく若き心あり。初め吉房の子、後、助吉の養子となれり。

◎吉房

吉房は、建保頃の鍛工にして、番鍛冶二十四人の一人なり。太刀姿幅ありて鎬廣く、庵淺し、切先は中位にして鍛正目なり。然れども木工肌ありて、稍あわけたる鍛なり。地色白めに見ねて黒みを帯びたり。焼双は丁子双大ぶさに逆亂れ、先は尖れり。又玉焼もなきにあらず。地双ともに其の鍛目に木工あり。双色は青き方なり。地へ焼入れたるもありて、其の先は、消やるがごとくに見やるものなり匂ひ深くして沸なし、鋩子は、焼詰めたるものもなきにあらず。中心は棟肉、鑪目は大筋違にして先は栗尻なり。外に助房の子孫にして同銘三代あり。丁子双なれども、後は劣れり。皆大銘なり。後に又一人、直双小亂双を焼きしものあり。又備中にも同銘のものあり て。紛らはしきことあり。

◎貞真

貞真は、弘安頃の刀工なり。其の太刀姿少しく細く、重ね厚く、鎬狭く、且つ庵深し。鍛正目如何にもこまやかにして地色青く。焼双は、腰をあらはして焼くもの多く、のたれ双に逆足を雑へ、丁子双は稀なり。上の双廣く、鋩子の内、直刃丸く、少し返れり。双色は

稍青めなり。又浮きあがりたるがごとくに堅し。沸はありて細なり中心は、小肉棟にして横又は筋違の鑪目なり。先は栗尻なり。

◎近包

近包は、弘安頃の刀工なり。太刀姿細く、庵淺く、小切先なり。鍛木工肌あり。燒刃は小亂にして、古備前の風を備へたり。又吉平の作に似たるところあり。上にて刃少なく小出來なり。少しく沸ゐ、鋩子丸し。中心の棟小肉にして鑪目は筋違、先は栗尻なり。

◎則房

則房は、助房の子にして高津に住し、片山右馬允と稱す。建保頃の鍛工なり。太刀姿反高く、棟厚く、庵中にして鍛正目、鐵色冴ゐて如何にも堅く見ゆるものなり。丁子刃の大ぶさなるを、細やかなる亂刃に交へて燒くなり。又丁子刃の亂足を、地に深く燒入れて、小亂をいろゐて景氣を燒く、其の刃色青し。上の刃廣く、鋩子の內、直刃丸く、少し返る。而して刃は浮きあがりたるが如くに見ゐて堅し。此の人の作に荒波といへる太刀あり。海上にて鍛ひたるところのものなりと云ふ。

◎是助

是助は、建保頃の鍛工にして、番鍛冶二十四人の一人なり。刀姿庵淺く、小切先にして木工肌、多くは白けて肌宜しからず。直刃にして少しづゝ亂れたり。鋩子は丸し。中心棟は肉、鑪目は筋違にして先は栗尻なり。

◎助眞

助眞は、文永頃の鍛工にして則宗の弟子なり。太刀姿反高くして長く、鎬中、造りは甚だ丈夫なり。小切先にして庵は中もあり、淺き

もあり。鍛正目細かに地色黒し。又棟焼なるもあり。其の姿大一文字に能く似たり。焼刃は、大亂丁子刃なり。又能く沸たるもあり、丁子刃は、頗る見事なり。而して刃は、にほやかに澄める色あり。鋩子は丸し。中心の棟肉、鑪目は小筋違にして先は栗尻なり。銘に二字を打つものゝみ。後年鎌倉に至りて修むるところあり。大に名手となれり。是れ即ち藤源治の祖なり。

◉守家

守家は、畠田の住人にして、寶治頃の刀工なり。太刀刀姿鍋少しく廣く、庵淺く、小切先なり。鍛正目誠にこまやかなるものなり。地色は底青く、上黒し。然れども間々白けたるものもあり。丁子刃にして元にて亂を專らに焼き、先に至るに從つて其の亂れ少なく焼き丁子の姿少しく角立てり。又瓢箪刃、二重の丁子刃もあり。又腰刃

をあらはして廣く焼きたるものもなきにあらず。のたるゝ心もあり又上の刃しみたるものもなきにあらず。鋩子の造りは丸し。小脇差は甚だ稀なり。造り直にして小幅なり。中心棟肉、鑪目は筋違にして先は栗尻なり。守家造刃は作の字のなきもあり。二代目同銘は丁子刃なれども少しく劣れり。瓢箪に二重刃はなし。銘に守家造とあり。又長船の一人同銘あり。又家助も斯くのごとく銘を打てり。

◉眞守

眞守は、建治頃の鍛工にして守家の孫なり。刀姿の大體に於いては守家に能く似たり。庵淺く小切先にして肌は少しく粗き心なり。亂刃、丁子刃の大出來、又逆亂に逆足を入れ、これに直刃を交へたるもあり。又少しく沸たるものもあり。刃の上しみたるもの多し。鋩子は丸し。刃色青きものあるは、加減の過ぎたるが故なるべしと云

ふ。小脇差ありといへども、未だ其の如何を知らず。中心棟肉、鑢目は筋違にして先は栗尻なり。銘多くは二字のものゝみ。世八と打ちたるものありて、世の大に賞玩するところのものなり。然れども此の類は多からず。又伯耆に同銘あり。銘に伯耆大原眞守と打てり鑽甚だ太き方なり。

◎遠近

遠近は、守家の父にして畠田の住人なり。刀姿の大體は眞守の作と異ならずといへども、其の姿は丈夫なり。中心も亦同じ。

◎助光

助光は、吉岡一文字派にして貞永頃の鍛工なり。太刀姿長くしてふんばり強く、庵淺く、鍛正目こまやかなり。亂刃に小出來なり。逆足にして上は直刃に小足を入れたり。中心小肉棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。銘は、二字又は備前國吉岡住左近將監助光若くは備州吉岡住助光と打てるものあり。

◎助吉

助吉は、助光の父にして建保頃の刀工なり。太刀姿の大體は、助光の作に似たり。刃廣く逆亂、上にて小出來なり。又一文字と見る大出來のものもあり、中心の大體は、是れ亦助光に似たり。

◎眞利

眞利は、吉眞の子にして貞治頃の鍛工なり。太刀姿少しく細く、鎬少しく高くして反り、庵淺く、鍛正目なり。肌は稍あらき方なり。地刃ともに細かにして木工あり。燒刃は、腰元を小亂に、中程を大ぶさなる丁子刃にしたり。而して其の丁子の姿は、角立ていやしきものなり。是等は、守家の作に似たるものなり。又所々に足を入

れて燒入れたるもあり。砂流しあるもあり。是は、腰又をうつりのごとくに燒きたるものとす。鋩子の又廣し。中心棟小肉にして筋違鑪、先は栗尻なり。銘は二字のものゝみなるがごとし。其の他同銘則房の子にあり。又寛喜、正應の頃二人あり。

◎國宗

國宗は、備前三郎と稱す。曆仁頃の刀工なり。晩年相州に住せり。太刀姿幅狹く、且つ長くして重ね中、先細くして小切先なり。庵淺く、鍛板目にして肌粗き方なり。色稍白けたる方にして、腰元能く亂るゝ先へは、のたれ心もありて、上は、廣直又に、足を深く入れたるも多し。又丁子又にして小出來なるも、大出來なるもあり。いづれにも又の上、しみ出でたるもの多し。鋩子は丸し。鍛の善からざる故にや、沸少なし。然れども匂ひは深きものあり。小脇差あり、といへども、頗る稀にして見し人少なしと云ふ。中心は小肉棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。後年京師に上りて六波羅に住し、國直と打てり。是れ貞永頃なり。後正治、曆仁の間、鎌倉に至れり。彫物は甚だ稀なり。京師にて鍛ひしものには、棟燒もあり。子政宗、晩年國宗と打てり。嘉元三年五月日中原國宗と打てるものあり。是れ或ひは肥後の國宗ならんと云ふ。又備前國長船住人國宗作と打てるものあり。是は後の作にして別人なりとも云ふ。如何にや、未だ考證すること能はざるなり。

◎光忠

光忠は、長船の刀工にして寶治頃の人なり。太刀姿腰元ふんばり強く、元に反り、重ね厚つきも又幅の狹きもあり。樋を掻くもの多し庵淺く、小切先なり。鍛正目にして木工肌、且つ少しく白けたるが

如し。丁子刄の名手にして大出來なり。沸たるもあり。重なりたる丁子もあり。地へ深く亂足の入りたるものもなきにあらず。又切先の肉も亂るゝなり。此の作は、刄を專一となしたる故にや、肌に粗き心あり。地鐵も少しくあわけたるがごとし。小脇差の作はなし。中心肉棟にして鑢目は節遣、先は栗尻なり。又劍形のものもあり。銘は、光忠の二字を刻めり。

◎長光

長光は、法名と順慶と號す。建長頃の鍛工にして長船に住せり。太刀姿の大體は、光忠に同じ。樋多く、庵淺く、小切先なり。鍛正目細かにしてうつくし。丁子刄の名工として聞ゆ。亂足を丸く、且つむつくりとして、櫻花の咲き亂れたるがごとくに亂れしつらい、稻妻あり。刄の上木工あり。花やかにして匂ひ深し、元は丁子にして

先は、廣直刄に亂の雜りたるもあり。鋩子の內の亂るゝようつりもあり。小脇差は、甚だ稀なれば、此に明示すること能はざるなり。然れども太刀に比すれば、其の作稍劣れりとかや。中心肉棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。銘は二字なるもの多し。

◎二代長光

二代長光は、初代長光の子にして左近將監と號す。太刀姿は、大體に於いて、父の作に類し。樋は、一條又は二條のもの少なからざるなり。庵中にして銘ね厚く、肌は少しく白けたるもあり。其の鍛ひ父の順慶作を見る心地す。然れども其の優劣を比較するときは、父に劣ること數等。稻妻あり。大出來は稀にして大概小出來のもの多し。或ひは小亂刄又は中直刄にして足の入りたるもあり。又單に中直刄と見ゆるものもあり。又景光に紛るゝものもなきにあらず。又

庵は深きもありて、鋩子は丸き方なり。小脇差はあれども甚だ稀にして、重ねは厚き方にしてふくら少しくかれる氣味あり。小亂双にして小出來なり。鋩子は種々ありて一樣ならず。稀に直双のものもあり。劍樋等彫物あり。中心は丸棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。銘は、備前國長船住左近將監長光と打つ。又肉棟にして備前國長船住長光造、裏に弘安八年六月日と打てるものあり。又單に二字銘のものもあり。又小反に一人あり。長船とも打てり。尙ほ此の外別人にして同銘一人あり。

◎眞長

眞長は、長船の刀匠にして正應頃の人なり。太刀姿長光に似たり。ふんばり强く、切先つゞまやかに、庵淺くして太き樋を掻けり。丸留なり。鍛正目にして其の肌甚だ美事なり。尤も稍白けたるがごとし。地色は黑くして青みを帶ぶるものゝごとく見らるゝなり。燒双は、小亂双小出來なる丁子、又は直双もなきにあらず。又中直双にして尖りたる足のあるあり。又青江のごとくにして長光に類せるものもあり。鋩子は丸くして少しく沸ゐたるものもあり。小脇差は頗る稀なりと云ふ。中心肉棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。銘は眞長と打てるあり。又備前國長船住眞長と打ちたるもあり。

◎景秀

景秀は、光忠の弟にして寶治頃の鍛工なり。刀姿ふんばり强く、小幅にして鎬廣く、庵淺く、小切先にして鍛正目なり。肌は稍白けたるがごとく。亂双にして先の下り心に逆亂のもの多し。又ぶちはきつぱりとする心ありて、亂れし間は廣く、のたれ心もなきにあらず又双の廣きもあり。鋩子は丸くして少しく返りあり。又少しく沸る

もあり。又棟焼のものもなきにあらず。小脇差はありといへども其の如何を見ず。中心は肉棟にして鑢目は大筋違、先は栗尻なり。

◎景光

景光は、慶長頃の刀工にして長船に住す。順慶の子なり。太刀姿重ね厚く、鎬狹く、三角の心に作るもの多きがごとし。然れども又幅の中なるもあり。庵深くして小切先なり。鍛正目にして細かに、梨肌の心あり。少しく白けたるもの多し。焼刃は、小亂、鋸刃又は直刃に鋸足の交りたるものもなきにあらず。又地へ亂れ入りしもあり是は其の作宜しからざるなり。大抵刃上りの心あり。沸るもあれば直刃のみのものもあり。鋩子の内直刃にして先丸く、匂ひ深し。小脇差の造は直なるもの多く、且つ棟ね小幅なり。三つ棟、鋸刃又は直刃もなきにあらず。鋩子は、丸きも尖りたるもあり。其の全體の作

は、刀よりも勝れたるもの多きがごとし。中心は肉棟、角棟ありて鑢目は筋違、先は栗尻なり。此の作を景光造りと云ひ、幅狹く、重ね厚きを兼光造りと云ふ。銘は、二字のものあり。又備州長船住景光と打ち、裏に弘暦二年十二月日を打てるものあり。又備前國長船住左衛門尉景光と打ち、其の裏に元德三年三月と打てるものあり。尚ほ其の他一二種の銘ありと云ふ。

◎景政

景政は、大宮派の刀工にして康應頃の人なり。刀は、樋又は鎬造りもあり。大體は、景光の作と異ならず。鋸刃にして少しく逆亂れの心もあり。又地は亂れ入るものもあり。小脇差は、是れ亦景光と同じ。然れども強て其の異なる點を擧ぐるときは、少しく亂心にして大なるもあり、又彫物もあり。中心は肉棟にして筋違鑢、先は栗尻

なり。

◎義光

義光は、建武頃長船の刀工にして景光の子なり。刀姿は大體景光に似たり。樋もありて庵深し。切先種々ありて一樣ならず。鋸双又は鋸にのたれの入交りたるもあり。又間々直双のものもなきにあらず小脇差の送りは直にして直双多く、又時としては鋸双の入交りたるものなきにあらず。又兼光作のごときものもあり。中心角棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。

◎兼光

兼光は、建武頃長船の刀工にして、景光の子、正宗の弟子なり。太刀姿幅廣く、庵深し。三つ棟もあり。中切先にして樋もあり、細し鋒元五分ばかり上にて丸止となしたり。鍛板目にして白ける地にう

つり顯はれて見ゆるものなり。沸なく鋸双も、のたれ双もあり。又は廣直双に足の入りたるもなきにあらず。鋩子は、丸く、又は尖りたるもあり。小脇差の造りは反りて、重ねうすく、幅廣く、又は直なる造り若くは寸の伸び過きたるものもあり。燒双は、鋸双、のたれ双、又のたれに鋸の交りたるもあり。又直双もありと云ふ。鋩子は、尖りたるもあり丸きもあり。中心は、角棟又は丸棟あり。鑢目は、筋違にして先は栗尻なり。此の刀工は、彫物の名手にして、剣倶利加羅長短し。正宗の弟子となりてよりは、鎌倉風に染みて、最も美事なり。未だ鎌倉風を習はざる前にありては、幅も細く、亂れを小足に打ちたるものなりと云ふ。銘は、表に備州長船兼光、裏に延文六年三月日と打てるあり。又備前國長船住兼光、又表に備州長船住兼光、裏に延文三年七月日若くは觀應二年八月日と打てるもの

あり。

◉師光

師光は、兼光の子なり。兼光に似たる作なり。

◉兼長

兼長は、康暦頃の刀工にして長直の子なり。大體の鍛冶は、兼光作と異ならざるなり。尤も能く沸るも大出來なるもあり。

◉倫光

倫光は、貞治頃長船の鍛工にして兼光の子なり。刀姿幅廣きあり。又中位なるものもあり。庵深し。三つ棟もあり。多くは彫物あり。燒刃は、大のたれ刃、又は亂れの雜りたるぐのめ心に亂るゝもあり鋩子の形は、種々ありて一樣ならず。小脇差は、反りたる造にして其の幅廣く、重ね薄し。燒刃は、大のたれ刃多し。然れども間々小

さくのたれて、尖りたる足の交るもなきにあらず。中心は、肉棟角棟の二種ありて、鑢目は筋違、先は栗尻なり。

◉季光

季光は、貞治頃長船の刀工にして兼光の弟子なり。刀の造りは、ひらりとして庵深く、三つ棟もあり。中切先小切先の兩樣あり。燒刃は、鋸刃にのたれの交るもの多しといへども、鋸刃もあり。又ぐのめ亂れのごとく思はるゝものもなきにあらず。能く沸わず。鋩子は種々ありて一樣ならず。小脇差の作は、反りて幅廣く、概ね刀と其の作を齊しくす。然れども直刃もあり。中心角棟にして、鑢目は筋違先は栗尻なり。

◉基光

基光は、貞治頃長船の刀工にして、兼光の弟子なり。其の鍛刀の姿

は、政光に能く似たり。出來も亦甚だ甲乙なきがごとし。然れども少しく沸たるもあれば、是等は小異の點なるべし。小脇差は、其の造り、中心ともに政光に於けると異ならず。

◉基政

基政は、是れ亦貞治頃の刀工にして、兼光の弟子なり。其の作、すべて基光に異ならず。然れども燒刃のふち少しく高く、亂れも細かに、沸も少なくして、其の品位稍劣れるものと謂ふべし。

◉長義

長義は、建武頃長船の刀工にして正宗の弟子なり。太刀刀ともに、其の姿、幅廣く、重ねうすく、中切先にして庵深し。三つ棟もあり鎬狹くして樋を掻きたるもあり。鐵板目にして肌の白けたるもの多きがごとし。地は黑くして少しくあわけたるがごとき色あり。燒刃

は種々ありて、のたれ刃、大出來なる逆亂れに、のたれ心のあるもあり。又ぐのめの心のあるもあり。皆燒に逆亂れの交るもあり。先の刃廣くして沸多し。鋩子は丸く、又は尖りて返り甚だ深きものあり。小脇差の造りは反りて、幅廣く、重ね薄く、其の出來は、刀と異ならず。寸の伸び過ぎたるもあり。其の大體に於いては、雄然として鎌倉物と見ゆるものゝごとし。中心は角小肉棟にして鑢目は筋違、先は栗尻なり。銘は、備前國長船住長義と取り廣げて打てり。又備州長船住長義、裏に應安六年十二月日と打てるものあり。其の子長清、後に父と同銘に打ちたりと云ふ。

◉元重

元重は、是れ亦建武頃長船の刀工にして正宗の弟子なり。太刀姿は幅廣く、重ね中、又は厚きもあり。庵深くして中切先なり。木工肌

ありて白けたり。其の樣恰も備中物のごとし。沸なし。鍛板目のごとくにして細かなるもなきにあらず。燒刄は、中直刄に、逆足刄は鋸刄の交りたるもあり。刄玉のごとくに入亂れて、甚だ異風なるものもあり。刄色は青くして底に光あるものゝごとく、鋩子は丸し。小脇差の造りは、幅ありて反りたり。大概刀の作に於けると異ならざれども、のたれ刄もあり。中心の棟は、種々ありて一樣ならず。筋違鑢にして栗尻なり。晩年伯耆の國槍原に住せりと云ふ。

◎近景

近景は、正應頃の人にして長光の弟子なり。其の鍛冶の大體はすべて元重に似たり。

◎重眞

重眞は、延文頃長光の弟子となり、後貞宗の門に入る。刀の大體は元重の作に似たり。燒刄は、小さき鋸刄に鼠足の入りたるものあり甚だ麗しき鍛なり。其の他中心のごときも亦元重と異ならず。

◎助國

助國は、元德頃の刀工にして國分寺に住す。太刀刀の姿は、庵深く小切先にして鍛正目こまやかなり。刄は小亂れまじり、所々沸ゐたるもあり。刄打ちのけあり。小脇差は甚だ稀なり。中心肉棟にして鑢目は、中筋違又は大筋違もあり。先は栗尻あり。

◎家盛

家盛は、畠田の一族なりと云ふ。刀の姿反高く、鎬狹くして庵は中鍛正目にして小切先なり。小亂れ、大亂れ等の燒刄あり。中心は、肉棟にして横鑢、先は栗尻なり。家盛の二字又は源の一字を打てり。

◎守次

守次は、畠田の末にして貞治頃の人なり。刀姿は、鎬廣く、庵中、小切先なり。鍛正目にして肌こまやかなり。燒刃はのたれ亂れ、又は大のたれもあり。中心は小肉棟にして鑪目は小筋違、先は栗尻なり。

◎守恒

守恒は、畠田守家の子なり。或ひは云ふ眞守の子なりと。太刀姿守次の作と異ならず。中心は角小肉棟にして鑪目は大筋違、先は栗尻にして棟の方稍尖りて、劍形のごとくなれり。

◎國盛

國盛は、大宮一家の刀匠なり。もと平安城大宮より備前に移りしものなるを以て、備前の地鐵に、京物の姿を裝ひ、大和物にて包みたるがごとし。其の作惡からず。中心は丸棟、角小肉棟の二種あり。筋違鑪にして先は栗尻なり。國盛の二字を銘す。

◎雲生

雲生は、鵜飼庄の住人にして建治頃の法師なり。刀の姿細く、鎬廣く、庵深く、鍛正目甚だ細かなり。肌の稍白けたるものなり。燒刃は、小亂れに逆足交り、直刃、直刃に足の入りたるもの等あり。沸は少なきも多きもあり。鋩子は丸くして少しく返りあり。小脇差は甚だ稀なるものなり。造りは直なるもの多し。中心棟は、肉刃は角ありて、鑪目は小筋違、先は、栗尻なり。雲生の二字を銘す。

◎雲次

雲次は、雲生の子にして文保の頃、鵜飼庄に住す。刀の姿、鎬大に廣くして低し。刃間々高きものもなきにあらず。庵中にして小切先肌白けたり。鍛板目にして、地の青きもあり。刃は、小亂刃、直刃

等あり。又直刃に小亂の交りたるもあり。能く沸に、鋩子は大にして丸く、少しく返りあり。其の樣、恰も備中物に似たり。小脇差は、造り直刃は反たるもありて、其の出來は、略刀に同じ。然れども其の品甚だ稀なり。中心は小肉棟にして鑢目は大筋違なり。先は栗尻。備前國住雲次と銘を打てり。同名のもの四人あり。

◎雲重

雲重は、二世雲生の子にして、建武頃鵜飼庄に住す。刀の姿幅廣く鎬亦廣く、庵淺く、切先種々ありて一樣ならず。鍛板目にして地青く、又稍白けたるもあり。又は、小亂又、直刃に少しく亂れたる等あり。能く沸に、鋩子は丸し。小脇差の造りは反りて、幅廣く、三つ棟もあり。又直刃もなきにあらず。其の他は、略刀と同じ。中心肉棟にして鑢目は大筋違、先は栗尻なり。

◎吉井物

吉井物とは、吉井盛則以下の一類が手に鍛冶せられたるものゝ總稱なり。今各人の作に依りて記述せんとすれども、いづれも皆大同小異なれば、此にはこれを概括して擧ぐるのみ。其の刀姿は、幅重ねともに善く、三角なるも否らざるもあり。庵深く、三つ棟もあり。又切先の少しく伸びたるもあり。沸の有ると無きとありて、鋩子の形も頗々あり。小脇差の造りは、直なると反たるとありて、其の他に至りては、刀の鍛冶に於けると異ならず。中心棟は種々あり、鑢目は、概ね筋違にして先は栗尻なり。長則は、稍異なりたる作ありて、重ね厚く、庵淺く、又にぐのめ小亂交り、直又に小亂交もあり。又一見して青江と見るがごときもの

ありて、まなす肌なり。又長船景秀の子にして、景則と云へるものあり。其の鍛は、長則に似たり。其の他吉則、清則等の冶工あり。いづれも後年出雲に移り住す。

今古刀劍鑑定秘訣　卷之四

第七編　山陽道鍛冶（下）

◉備中國

備中物の大體に就いて、少しくこれを說かんに、刀の姿は、小幅にして間々廣きもなきにあらず。庵深し。三つ棟もあり。又丸棟もあり。小切先又は伸び過ぎたる若くは大切先あり。樋は、總て搔きたるもの多しといへども、其の幅廣からざるなり。彫物は、少なき方にして、其の之れあるものは多くは劍、梵字等なり。鍛肌は細かく栗田口物に近かく見るる物多し。概ね正目にして麗し

きものなり。

小脇差の造りは、幅重ね種々あり。大略直双多し。然れども少しづゝの足あり。是は概ね鼠足、逆足、逆亂等なり。双ぶちはきつぱりとして、淵ひこまやかに、鋒うるはしきものなり。直双、中直双もあり。鋩子は尖りたるものと丸きものとあり。返り深し。中心の棟は小肉にして、鑢目は、鏟鍬の上を大筋違に掻きたるものなり。又横鑢もなきにあらず。先は栗尻なり。尤も双の方は格別に厚し。

◎安次

安次は、青江鍛冶の祖なり。太刀姿鎬高く、鍛板目細かにして地鐵青く、渦巻の肌あらはれて剛く、双は、小亂、直双、逆足あり。沸こまやかに、匂ひ深く、鋭く見ゆたり。鋩子先伸びて、返り深く、

樋を掻きたるは備前物に類し、稀に彫物あるもあり。中心は小肉棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。銘は安次と打つ。

◎守次

守次の作は、總て安次と異ならず。中心は、備前物よりは先細く、双の方を多く摺り廻して栗尻となし、小肉棟、角棟あり。銘は、備中國住守次、備中國青江住守次、又は單に守次と打てるものあり。

◎貞次

貞次は、元暦頃青江の鍛工にして、二月の番鍛冶なり。太刀姿細めに鎬狹く、直双、小亂双あり。元を小亂のごとくに物打の邊に、廣直双に小亂の入りたるもの多し。又大亂双もなきにあらず。能く沸に、匂ひ深し。地肌は通常なり。此の冶工の作は、普通の備中物とは見ゆずして、特に勝れたる點多く、最も番鍛冶の本色を備へて、

鍛冶の上に顯はしたり。是れ他の企及すべからざるところなりと云ふ。中心は、小肉棟、角棟なり。筋違鑪にして先は栗尻なり。銘は種々あり。備中國貞次造、備中國住大隅權介平貞次、貞次等のものあり。貞次との銘なるものに至りては、其の下部に、梵字を彫りたるものもあり、然れども極めて稀なり。又安の一字を打ちたるもあり。小脇差に打てるものは、大抵二字のものゝみ多し。

◎次家

次家は、貞次の子にして元暦頃の刀工なり。八月の番鍛冶たり。太刀の姿、元にて反高く、棟厚くして庵淺く鎬狹し。地色黑くして澄める肌なり。多くは小亂双にして中程より上は、亂双多し。而して甚だ廣し。其の色青めにして堅き心あり。中心は肉棟にして筋違鑪先は栗尻なり。

◎恒次

恒次は、元暦頃の鍛工にして五月の番鍛冶なり。太刀姿反高くして尋常なり。庵淺く、小切先なり。鍛正目にして肌こまやかなり。燒又は、小亂、小出來の逆亂、又は直双もあり。鋩子は丸き方なり。小脇差の造りは直なるもの多し。中心の棟は種々ありて一樣ならず横鑪、筋違鑪等ありて、先は栗尻なり。二字銘のもの多しといへども、間々長き銘を打てるものあり、即ち備中國萬壽庄住左兵衛尉恒次と打てるものゝごとし。

◎次吉

次吉の作は、新藤五を見るがごとく、甚だ麗しきものなり。小脇差もあり。足ふかく、打ちのけのあるもあり。中心は角棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。銘は、單に次吉と打てるもあり、又備中國住次

吉作、其の下に暦應三年十月日、若くは貞和二年二月日、又は文和五年三月日、等を打てるあり。又備中國次吉作として、其の下に延文文和等の年號を切りたるもあり。

◎正恒

正恒は、粟和頃の刀工にして、俗に備中正恒と云ふ。太刀の姿長くして反高し。鍛正目いかにも細かなり。又は亂刃にして廣刃なり。かけり多し。地色は黑く、刃色は青くしてきはどし。中心は肉棟にして横鑪、多くは目貫穴の下に銘を打てり。

◎家次

家次の太刀姿は、幅ありて庵深く、切先伸びたり。下足に廣刃を燒く、其の樣恰も大一文字に異ならず。故に往々にして鑑定を誤ること多しと云ふ。但し刃先きはどくして少し淺き方なり。能く沸ゐて

匂ひ深し。好んで薙刀を作れりとぞ。中心は肉棟、角棟等ありて大筋違鑪、先は栗尻なり。銘は備中國家次作と打ち、又家次とのみ打てるもあり。

◎片山

片山の作は、其の治工數十人あり。片山一文字と云ふ。其の大體の姿は、幅、重ねとも中、庵も亦中、小切先、大切先あり。好みて長刀を打てり。刃は逆亂れ、大出來、又は亂入りたるもあり、沸は、多きも少なきもあり。鋩子は、丸きあり、尖りたるありて一樣ならず。返り深し。中心の棟は、多くは角なれども、間々肉棟もなきにあらず。筋違鑪にして先は栗尻なり。多くは無銘のものなりと云ふ。又片山には、關風のごとくに、足をならべたるがごとき足の燒方もあり。直刃などは、ふくらより上の部分を廣く燒くもの多しと云ふ

其の他、世に知られたる名工は、俊次（番鍛冶貞次の子）貞次（番鍛冶の外の人）秀次、次忠、次直、包次、直次、宗次、忠次、次能時次、吉次（正和頃）助次（同上）恒次（番鍛冶のそれにあらず）次弘、爲次、次俊、久次（文保頃）守遠、國次、重次、弘次、直次（延文頃）守次、行次、則高、常遠、時眞、正恒、恒清、恒眞、常俊、康恒、安恒、國秀、是重、重末、行忠、業高、爲信、行利、在弘、弘恒、安家、眞景、眞行（正應頃）量重、安弘、有弘、康次、則實、宗恒、眞長、則房、則常、眞利等のごときは、最も上工と稱せらるゝところのものなり。又末の作に至りては、行忠、行眞、行家、次廣等のごとき、是れ亦良工と唱へらるゝものなり。而して是等の作は、大同小異にして甚だしき優劣を見ず。今其の中心の一瑕に就いて掲げんに、恒清の作は角棟にして筋違鑪、先は栗尻。康次俊次、助次、弘次、則高、守恒、眞景、次忠、重次、宗遠、吉次、秀次、忠次、直次、次吉、次直、家次、次廣等のごときは、各々角棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。多くは二字銘のものとす。其の異例のものゝみを擧げんに、備中國住人左兵衛尉直次作、康永二年八月日のごとき、備中國住人次吉のごとき、備中國住人長次作のごとき、備中國住家次作、應安七年八月日のごとき是なり。又家恒、常遠、茂次、春次、次直、國重、等のごときは、中心筋違鑪にして先は栗尻、銘多くは二字なり。其の長きものを擧ぐれば、表に備中國住春次作、裏に正平八年二月日と打ちたるがごとき、又表に備中國住直次、裏に貞和五年二月日と打ちたるがごとき、備中國押島住行重と打ちたるがごとき、備中國松山住藤原左兵衛尉國重作と打ちたるがごとき、備中國荏原住三良左衛門尉國重作と打ちたるがごとき

是れなり。而して此の國重は、前者にありては永祿十一年八月吉日、後者にありては天文二十年二月吉日と打てり。

◎備後國

備後三原物と稱するは、正家の初代及び正廣の二人を指して云ふものにして、これを古三原と唱ふ。一門數十人、其の鍛冶の姿は概ね相似たり。其の大體の刀姿は、鎬高く、又狹くして反りたるもあり。庵は中、及び淺きもあり。樋を掻きたるも少なからず。切先種々ありて一樣ならず。鍛正目といへども、唯、木工目のごとくに見ゆるもありて、其の肌白けたり。燒刃は直刃多く、打ちのけあるもの多し。又小ぐのめ若くは少しく逆足の入雜りたるもあり。能く沸ねたるもあれども又沸ざるもなきにあらず。鋩子は

尖りたるもの及び丸きものもあり。小脇差の造りは直にして、重ねよく、小幅なり。又反りて薄きもあり。亂れの入りたる大出來もあり。其の他の點に至りては刀と同じ。

中心の棟は、角にして横及び筋違鑢なり。先細くして栗尻なり。

以下各鍛工の特技とするところを詳述せんとす。

◎正家

初代正家は、正和頃の鍛工にして其の鍛方は、大體粟田口の風情ありて、其の艶照は、位稍劣れり。鍛目は、鋼元板目にして、中程より上は、正目にして肌細かなり。地色青く、切先伸びて鋩子丸く、直刃の太刀は、古關のものゝごとく、直刃のものは沸多し。中心は小肉丸棟にして横鑢、先は栗尻なり。備州住正家作と銘す。

◎正廣

正廣は、三原の刀工にして正家の作と大同小異なり。強て其の異なる點を擧ぐれば、太刀姿幅廣く、切先伸びて庵深く、鎬は、稍低き方なり。鍛板目木工肌こまやかに多し。地色は白めなり。腰元を小亂双に燒き、先は廣直双なり。亂双の部分は、左のみ沸もなくしてにほやかに美しきものなり。廣直双の所は沸多し。切先の內は、鋩子を少しく圓く返りを長く燒きかけたり。中心は角棟にして横鑢、先は栗尻なり。銘は、備州住正廣作と打てり。同銘二代ありと云ふ

◎辰房

辰房は、尾道の刀工なり。其の刀姿は、鎬高く、庵中、三つ棟もあり。直双は、きつぱりとして麗しく、ぐのめ亂れ、逆心のあるものもあり。又打ちのけ、大ぐのめ亂れ入りたるものなきにあらず。少

し沸にるもあり。彫物甚だ多し。鋩子は丸くして尖りたるものなし小脇差の造りは直、及び反たるもあり。又中脇差もあり。其の他刀に於けると異ならず。中心の棟は種々ありて一樣ならず。鑢目は横鷹の羽等ありて、先は劍形なり。

◎一乘

一乘は、法華一乘と號す。一門多し。刀姿小幅にして鎬高し。庵は中、三つ棟あり。切先の甚だ伸びたるものなきにあらず。燒双は、小亂双、中亂双、皆燒、又は直双の所々亂れたるもあり。鋩子は種々ありて、沸すべて粗くして多し。小脇差の造りは、直及び反たるあり。其の他刀に等し。中心は横鑢、先は栗尻にして肉棟なり。銘は法華一乘と打てり。又多寶の梵字及び南無妙法蓮華經を銘とするものなり。

◎貝三原

貝三原とは、貝に住する冶工の總稱にして十數人あり。其の刀姿、鎬高く、重ねよく、庵種々あり。小切先なり。廣直及に少しみだれたるも、又のたれたるもあり。沸なくしていやし。又小ぐのめもあり。尋常の三原物のごとく見ゆるものもなきにあらず。小脇差は甚だ稀なり。中心は肉棟にして鑢目は小筋違、横等ありて、先は栗尻なり。然れども細し。

其の他行吉、貞家、親次、秀次、實貞、實光、正則、國正、助國、兼安、兼光、兼吉、兼守、貞正、正近、賀正、正直、長光、家廣、正興、貞信、正清、友行、宗久等の治工あり。是等の作は、中心は肉棟、角棟、小肉棟等ありて、横、大筋違、小筋違、ひがき鑢等なり。先は概ね栗尻なり。間々劍形のものなきにあらずといへども甚

だ稀なり。銘は長く打つもの多し。今其の一班を擧げんに、備州住兼安作、備後國三原住家廣、備後國三原住人藤原貞正興、備州三原住正賀作、備州尾道住五阿彌貞信、備後國三原住人貞正近、備後國三原住正義、備後國鞆住貞家、備州住正清、三原住友行、備州住宗久、備州三原住貞正貞、備州小田住家重、備後三原住正則等のごとく、概ね國名、地名を冠するものゝみ、是れ他に多く其の類を見ざるところなり。其の他工匠少なからずといへども略す。

◎安藝國

◎安行

安行は、筑前の定行の子にして、安藝に來たり住せり。其の鍛冶の風は、相州物に似て花やかに、鍛正目なり。中心は丸棟にして左の

國弘のごとし。波平の同名異人なること勿論なり。大筋違鎺にして先は栗尻。安行と銘せり。小春に於ける鍛刀には、左の一字を銘するものあり。同銘二代あり。

◎國光

國光は、安行の門人にして上工なり。其の鍛は、相州の貞宗の風情にも見ゐて、甚だ麗しきものとす。

其の他守弘、國弘、定行等のごときも、筑前より來たりて、暫く冶刀の業に從ひしことあり。世に大石の左と稱するは、此の一類のことにして、家永、敎永、敎光、利延、光世は、三池の末流、左の弟子となりて、小春と筑後の大石に住す。其の作、皆左の風あり。

又入西といへる刀匠あり、安藝に留まりて冶刀の業に從へり。其の作の中心は肉棟にして筋違鎺、先は栗尻なり。銘は、目貫穴の左右にありて、安藝國人西とは又の方に打ち、棟の方には、永仁伍年潤十月日と打てり。

◎周防國

◎二王

崇德天皇の御宇、保延、永治中、二王三郎清眞なるものあり。其の子清平、嘉應中其の子清綱は元久中の刀工なり。或ひは後深草天皇の御宇、建長中、元祖二王清眞、乾元中清平、正和中は清綱の初代ともいへり。爾後同銘三代あり。初代の清綱は、二字銘を吉となし綱の字を草に切れり。又有世と銘を打ちしことありと云ふ。又二代目は實清とも打ちて、綱の字を眞字にしたり。二王清綱と切りたるは三代目なりといへり。或ひは備前國高綱は、貝西の父、或ひは貝西

と同人にして、金剛兵衛盛國の父ともいへり。又或ひは豐後の國兼平の子清平、其の子清眞、嘉應中の刀工なり。其の子清綱、宗三郎と號す。世に二王三郎と稱するは是なりとも云ふ。

二王初代の作は、刀の姿鎬高く、幅狹く、重ね厚し。直又きつぱりとして、打のけもあり。二代目は、亂れ直廣又に燒き、沸こまやかに鋩子は丸く、返り深くして、樋を掻きたるもの多し。小脇差、中脇差もあり、造りは、反たるもの及び直なるもあり。幅、重ね種々ありて一樣ならず。中心は短くして小肉棟なり。又の方も亦同じ。先は、又の方よりも多く摺廻し、棟の方よりは少しく摺りたる片山形のものなり。

◎清景

清景は、清綱の子なり。太刀姿幅廣く、亂又にて鋩子は丸く、返りは深し。地鐵黑く、樋ありて備前樋の如し。銘は、總て二王清景と打てり。

◎二王一門

二王の一門は少なからずといへども種重、清宗は名手にして、清正清忠、清長、清重等の作は、末の金剛兵衛の外、紛らはしきものなく、清光は、備前鍛ひにして良しと云ふ。案ずるに、備前清光も、其の本國は周防にして同人なるやも知るべからず。其の他二王一類として名あるものは、景清（延文中）清信（明德中）清永（應永中）政廣（應永中）清眞（正長中）是助（文安中、富田に住みて、次郎太郎と稱す）清種（長祿中）清元（應仁中）清宗（文明中）清久（同上）清尙（大永中）よしきよ（文明中）膳清（大永中山縣に住し、朝廣と號す）元清（文龜中）元作（永正中）元正（天文中）正綱、

政繩、道清、眞清、實清、重眞、守清、長正、勝臣、清、青井等の二十七工なり。是等の内にて、後年長門の國に住するものもありと云ふ。其の作の中心は、角棟最も多く、間々角小肉棟もなきにあらず。鑢目は、筋違、横等ありて、先は概ね劍形なり。唯清綱、清宗の二人のみ栗尻多し。銘は、二字のものあり、又防州、防州住、若くは二王の文字を冠するものあり。

◎長門國

◎顯國

顯國は、安吉の弟子にして貞和頃の鍛工なり。刀の姿は小幅にして重ねよく、小切先にして庵中、三つ棟もあり。又はぐのめ亂れにして能く沸ね、砂流しあり。鋩子の形は種々ありて一樣ならず。又細くして直刄もなきにあらず。小脇差の造りは直にして、菖蒲造り少なからず。中脇差もあり。いづれも其の造り、刀に異ならず。中心は横鑢にして先太く、栗尻なり。銘は、長州住顯國とあるもの多し。

◎安吉

安吉は筑前の刀工なりしが、建武頃長門に住し、治刀の業に從ふ。左文字を用ゐて銘となす。仍りて世これを左と稱し、又大左文字又これを略して大左ともいへり。此の安吉は、二代目にして安行とも銘す。案ずるに左も安吉にして、銘には、左の一字を用ゐ。此の安吉は、父の在世中は、安行と銘し、後は、父の名安吉と改めしものならんか。銘にも左の字を切り、筑州、長州、藝州とあり。是等の作は、皆二代目安吉の手に成りしものならんと思料せらるゝなり。其の太刀姿は、父の作に劣らず。粗き沸勝れて多く、匂ひ深く、地

鐵細かにして剛し。一見勇めるものゝごとく鋩子甚だ品位の高きを認む。中心は丸棟、小角棟等あり。先は栗尻にして細く、筋違鑪なり。銘には、長州道元安吉作、長州住安吉等のものありて、裏に正平十年八月日と打てるものあり。

◎顯吉及び其の他

顯吉、顯義、顯長、覺長、信重、行歳、行重、行觀、行長、長廣、重國、幸國、家國、治劍、盛清、壽政、清次等の治工ありて、其の作安吉、顯國等のものよりも劣るといへども、間々見るべきもの少なからざるなり。顯吉の作は、小肉棟にして大筋違鑪、先は太き栗尻なり。顯長の作は、小肉棟にして横鑪、先は栗尻なり。行重の作も亦同じ。安國の作も、小肉棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。重國の作は、角小肉棟にして横鑪、先は細き栗尻なり。銘はいづれも長州住何某と打てり。

◎二王派

長門の二王派は、周防の末葉にして、方清、清定、清實、重太郎、清重、清長、重國、清春等の治工あり。皆天文より慶長の後も同銘數代ありと見ゐたり。其の作の大體は、周防の二王に酷肖せり。角棟、小肉角棟等ありて鑪は大概横なり。先は栗尻にして細し。銘は長州住二王何某作と打つもの多し。右の内にて方清、清定、清實、清重、清長、重太郎等の作は、新刀辨疑には、これを新刀として掲載したりといへども、これを斷定する考證に乏しきが如し。恐くは慶長前後の作にして、強て新刀とな

第八編　山陰道鍛冶

◉丹波國

◉國俊

國俊は、畠と號す。刀姿鎬高くして庵淺く、鍛正目なり。又は直又のもの多く、間々小亂又あり。鋩子は杉形、三つ棟、又庵棟のものもなきにあらず。樋は、棟の方に寄せて連樋多し。銘は、國俊又は丹州住畠國と打ちたるもの稀にありと云ふ。中心は反りて角棟、先は栗尻にして横鑪なり。又來の一字を切りたるも多し。

其の他、長末、幸貞、國光、國定、正國、正次、國眞、國實、幸次、幸眞、光助、光包、有正、重利、清光、幸成、元眞、金重、爲友等の治工あり。天福中は、奥州の月山此の國に來住せり。

◉丹後國

◉宗忠

宗忠は、宮津に住す。或ひは備中正恒の弟なりとも云へり。其の作大に善し。中心は、丸棟、肉棟ありて、大筋違の左鑪なり。實に美事なる作なりとす。

其の他爲恒、守行、行光等の刀工あり。然れども其の作未だ詳ならず。

◉但馬國

◉國光

國光は、隼人正と云ふ。薙刀の名手なり。横鎺にして但州法城寺住國光と銘す。

二代目國光は、相州貞宗の門人なりと云ふ。或ひは云ふ貞宗の門人となりしは、二代目にあらずして初代の國光なりと。未だ孰れか其の眞なることを知らず。法城寺に住するを以て、世々法城寺或ひは法城寺とも銘を打つ。同銘三代あり。四代目を光俊と云ふ。初代の門人貞興、其の子貞次、又新井其の子藤八、其の子重貞、國安、貞明等の一門十數人あり。然れども、其の作の傳はるもの少なし。故に今此に其の詳細を說くこと能はざるなり。他日得る所あらば補訂せん。

◎因幡國

◎景長

景長は、因幡小鍛冶と號す。同銘三代あり。初代は、地鐵色青く、鍛正目にして細かに、粟田口一門の風情ありて、其の位の劣れるものあり。直刄のものは國吉に似たり。中心の棟は角にして小肉あり、一門の作、皆それぞれ大同小異なり。銘は、因州住景長と打てり。行景は、景長の一類なり。其の作相似て劣れり。銘に、因州太郎左衛門尉行景と打てり。

◎伯耆國

◎安綱

安綱は、世に傳ふる所に依れば、頗る舊くして大同中の刀工なり。其の作は、地鐵細かに冴ゑて、鍛板目にして立波のごとくになれり

故に後世の肌には、大に異なるところのものあり。而して安綱父子ともに名工なり。此の父子は、肌金を加へて作りし嚆矢なりともいへり。又は大のたれにして、沸勝れて多く、匂ひ甚だ深し。則重の風情に似て、位大に高く、舊くして其の作の非凡なるを知るに足らん。樋は廣くして淺く。彫物の劍、梵字は大に深し。中心は丸棟、小肉棟等ありて一樣ならず。鑢目は筋違、又は横にして、先は栗尻及び劍形のものあり。其の他、眞守、眞綱、有綱のごとき、皆安綱の一門にして、就中眞守の作、最も勝れたり。中心は大丸棟にして横鑢、先は栗尻なり。

其の他爲清、國宗、廣賀等のごときあり。又、爲吉、安則、安守、武保、日照、日乘、月乘、日光、重永等のごとき一類、凡そ數十人の多きに至れり。爲清の作は、其の中心小肉棟にして筋違鑢、先は劍形なり。國宗の作は、角棟小肉にして筋違鑢、先は栗尻なり。廣賀の作は、中心角棟にして、又の方は、急に先は斜に細くなり、栗尻にして横鑢なり。銘は、伯耆國住廣賀作とあるは表にして、裏に永祿十年三月日と打てり。或人曰く、是は永正大永の作なりと云々。又宗隆、盛則、則耀、則國、光助、有行、有正、有包、泰師、有國等のごときは、大和、陸奥及び伯耆の間に往來したる鍛工にして、元重三代、國宗、近則等、同銘數代の鍛冶、異銘の刀工等甚だ多し。根むらくは未だ其の作の良否を見ること能はざるを。

◉出雲國

◉守則

守則の太刀姿は、備前物に似て、鍛正目細かに、吉井物に變ること

なく、最も小亂の名手なり。或ひは道永は、此の守則の法號なりと云い、或ひは雲上の子、永則法名を道永とも云ふと謂へり。其の孰れか是ならん。盛則と云へるも亦恐くは同人なるべし、中心は、筋違鑪にして角棟、先は栗尻なり。

吉則、清則、景則、正則、則綱、重則、則定、實眞、景綱等のごときは、皆上工の分に屬せり。是等の鐵冶になりしものは、地鐵細かにうるはしく、小亂又、玉垣、直又は、最も其の巧なるものなり。鋩子はいやしくして關に近し。然れども地鐵の心は、關と備前との見所、出雲と吉井の變りはあるべし。關を備前と見るは拙く、備前の出來のあしきものには、關に紛らはしきものあり。道永の關と紛ふところ、皆斯くのごとくなるによりて、初心の間々誤ることなしとせず。然れども其の用は、唯、善惡の二つのみなり。吉則の中心は、初代二代ともに角棟にして、筋違鑪、初代の先は栗尻、二代目は棟の方に寄りて稍劍形をなせり。正則の作は、中心は角棟にして筋違鑪、先は劍形なり。

按ずるに此の一門を指して、皆道永といふことは、左の國弘、貞吉といふがごとく、備前吉井と當國との間を往來して同人多かるべし。

◉岩見國

◉直綱

直綱は、相州正宗の弟子にして、父は石見の國出羽に住せる左衛門尉盛綱なり。鍛板目にして大亂れ花々しく、鋩子もみだれ、返りも亦みだれて長し。沸粗くして多く、左文字志津等とは替りて、花やかなれども、實は大に及ばざるところあり。中心は、角棟小肉にし

て筋違鑪、先は劍形なり。

其の他、貞綱、末の直綱、正利、末綱、兼綱、守利、末繼、正弘、眞元、兼定等のごとき一類あり。其の作大同小異なりといへども、いづれも直綱に及ばざること遥に遠し。貞綱の作は、中心角棟にして筋違鑪、先は劍形なり。守利の作も亦同じ。末繼の作は、中心角棟小肉にして横鑪、先は劍形なり。銘に石州長濱住末繼とあり。正弘の作は、中心角棟にして小筋違、先は栗尻なり。銘に石州長濱住正弘作とあり。而して其の弘の字を𠂉となしたり。眞元の作は、中心角棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。兼定の作は、中心角棟にして横鑪、先は栗尻なり。銘に石州長濱兼定とあり。

◎隱岐國

隱岐の番鍛冶と稱するものあり。二ヶ月ごとに一人にして左のごとし。

正月、二月　則國（栗田口國友の子にして藤右馬允と號す）

三月、四月　景國（栗田口久國の子にして後、大隅權守に任ず）

五月、六月　國綱（國友、久國等の弟にして藤六と稱し、左近將監に任ず）

七月、八月　宗吉（備前國福岡住人にして、左近太郎と號す）

九月、十月　延正（備前の國の住人にして中原權守、或ひは信房の子信正とも云ふ）

十一月、十二月　助則（備前の國の住人にして助宗の子、修理亮と稱す）

以上の六人は、二ヶ月宛、御番勤と云ふ。或ひは云ふ、御銘には、助秀と打ちたまひて、菊花の大いさ五分半、十七葉のものなり。中の莖には、大小ありて鋼の下にありと云へり。

第九編　南海道鍛冶

◎紀伊國

◎包貞

包貞は、本國は大和の刀工なり。紀伊に來たり、入鹿に住し、以て冶刀の業に從ふ。世此の一族を稱して入賀物と號す。太刀の姿、關に似て、鍛正目細かに、沸ありて匂ひ深く、直及のもの多く、鋩子丸くして返り淺し。小脇差の造りは直にして、幅、重種々あり。中心は小肉棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。入鹿住包貞と銘を打ちたり。

◎實次

實次の作は、肌以下保昌五郎に似たり。中心は小肉棟にして、刀は横鑢、小脇差は筋違なり。其の他實綱、則實、實經、重實、實行、國次、仲國等の冶工あり。國次の作は小肉棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。仲國の作は、中心は角棟にして筋違鑢、先は栗尻なり。實綱の作は、中心は角棟にして大筋違鑢、先は栗尻の摺上げたるがごとし。此の外、なほ左の冶工あり。

景宗（貞治中本宗の子）
吉重（天正中熊野の住）
貞實（景實の子）
賀實（永享中）

實可（未詳）　實經（初代實次の子、建保中二代あり）
實守（弘安中實次の子）　光長（京、大和、紀伊、舞草皆同人なり）

◎國次

國次は、應永頃の鍛工にして、粉河に住す。太刀、刀、中脇差、小脇差等種々あり。其の鍛冶の姿は細く、庵深く、丸棟もあり。鍛目は、正目及び板目の二種あり。燒刃は、直刃にしてきつぱりとするなり。沸もなくして堅く、甚だ細し。たま〳〵ぐのめに亂れたるものあり。又皆燒もなきにあらず。鋩子は丸し。中心の棟は丸く、鑪目は、横及び筋違の両樣あり。先細き栗尻にして刃上りなり。銘に打てる國の字を、図となせるを以て、其の形に依り、俗に簀戸國次と云ふ。

◎國實

國實は、應永頃の鍛工にして、初め大和に住みしが、中頃紀伊に來たり住し、以て冶刀の術をなしたりと云ふ。其の太刀姿は、細くして反り、庵淺く、鍛正目にして如何にも細かに、地色は、底黑くして表面は青みを帶びたるがごとし。燒刃は、直刃、直刃に小足入り大のたれ刃等のごとく、其の作一樣ならず。其の刃色は、花やかにして煙のごとく、恰も備前物に能く似たり。中心の棟は小肉にして横鑪、先は栗尻なり。今系圖に就いて、これを閲するに國實なるものなし。然れば何人かの隱名なるか、今其の作の手癖によりて推測するときは、前記の國次にあらずやと思はるゝ廉なきにあらず。然れども國次に隱名あること、未だ曾て古書に見ざるところなり。姑く疑を存して此に記するのみ。

又天狗と銘する鍛冶熊野に住し、數代嶽の名工にして世の嘆稱する

所なり。

◎淡路國

此の國には、房國、安重、國重、次助、利國、國長のごとき冶工あり、と雖も、其の作の傳ふるもの少なく、從つて其の如何を詳悉することは能はざるなり。

◎阿波國

◎氏吉

氏吉は、貝府（又は海部）太郎と號す。康曆頃の刀工なり。同銘數代あり。初代の作は、刀姿幅重ねとも中位にして庵深く、大切先もあり。又は、廣くのたれ、殊に刃の先廣し。其の大體に於いては備

中物に似て、地鐵うるはしく、沸の心は、薩摩波平の風情ありて、匂ひは沸に比すれば稍劣れども、能く切るゝこと勝れたるものなり小脇差の造りは直にして、三つ棟もあり。直刃又はのたれ亂れもあり。又皆燒刃もなきにあらずといへども、是は甚だ稀なるものなり中心は肉棟、鑢目は勝手下りあり。末の作は、切刃にして庖丁鍛冶に似たり。最も下作に屬す。銘に氏吉の二字を切りたり。

◎泰吉

泰吉の作は、氏吉よりは地鐵一層剛く、其の姿大に勇めるものゝごとく、殊に備中物に似て、小亂刃花やかに、沸亦善くして匂ひ深し中心は肉棟にして横鑢、先は栗尻なり。銘に阿州住泰吉と打てり。此の刀は、天文の頃和泉堺に於いて、三好の戰爭に當り、大に功を奏したるものなりと云ふ。

其の他此の國に氏善（永正中）泰吉（大永中）吉氏（永德中）有吉（永德中阿波海府阿加の住人）國吉（西字の住）等の冶工あり。又師久、師次、師宗、氏房等のごときあり。是等の刀劍の世に傳はるもの少なければ、其の如何は記述しかたし。

◉讃岐國

◉清房

清房は、佐渡守と號す。刀姿の全體は、備前物に似て劣れり。中心は肉棟にして横鑪、筋鑪鑪等あり。先は栗尻なり。

◉業宗

業宗は、太刀の作、全體に於いて備前物に似たり。鍛板目、鎚子細く、地にのぼりて尋常に、且つ沸小さく、匂ひ深し。中心は角棟小肉にして筋違鑪、先は栗尻なり。

◉秀延

秀延の太刀姿は備前物にて勇きしき出來なり。先づ業宗の作と稍同じきものゝごとし。中心は小肉棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。讃州志度之住藤原秀延作と打てる銘あり。又二字銘もありと云ふ。

◉山蓮

山蓮の太刀刀姿は、鎬高く反り、三つ棟にして鍛正目、沸なく匂深からず。鎚子尖れり。中心は角棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。山蓮と銘す。此の二字或ひは横に切りたるもありと云ふ。

其の他秀行（志度に住す）景宗（尾越に住す）景光（香川に住す）等の作は、いづれも秀延に似たるものなり。又重次といへる冶工あり。其の作の如何は、これが一斑を記述すること能はず。是れ世に

乏しきものなるを以てなり。

尙ほ讃岐の上工として傳ふる所に依れば行利、國利父子の三人ありといへども。其の物を見ざれば此に評記すること能はざるなり。

◎伊豫國

◎國吉

國吉は、鍛の名工と稱し、其の名夙に高し。太刀姿は、備前小反に似て、鋩子には、必ずふくらの所燒込みたるものあり。又は直又、亂及の二種あり。中心は小肉棟にして平横鑪、先は栗尻なり。銘は豫州住人國吉と打てり。

其の他仍房は至德中、安家は明德頃、高濱に住す。よりて高濱南、或ひは高津南とも云へり。重定は應永中、國重は嘉吉中、國吉の子鎭久は本國豐後高田より來住し、安長は永祿中、皆冶刀の業に從へり。此の外安勝、宗長、守久等の鍛工あり。今是等冶工の中心に就いて、其の一斑を擧げんに、國永の作は、角棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。豫州住國永と銘す。國則の作は小肉角棟にして筋違鑪、先は栗尻にして豫州住國則と銘す。安定、安家、安勝の作は、いづれも小肉棟にして筋違鑪、先は栗尻なり。銘は各々豫州住の三字を冠し、其の下に二字を打てり。鎭久の作は角棟にして横鑪、先は劍形なり。銘は豫州住鎭久作と打てり。

◎土佐國

◎吉光

吉光は、大和鍛冶の末流にして、曆應頃の鍛工なり。五郎左衛門尉

と稱す。或ひは云ふ、粟田口正光の弟子なりと。太刀姿は正光に似て、鍛正目、刄は直刄のもの多く、沸こまやかに、匂い深し。鋩子は杉形にして、返り深し。二代同銘あり。小脇差の造りは直にして小幅あり。重ね厚きもの多く、庵淺く、三つ棟もあり。直刄にして鋩子丸く、又沸あるも無きもあり。中心の棟は種々ありて一樣ならず。横鑪にして先は栗尻。動もすれば栗田口物にも紛るゝことあり故に初心の鑑定家にありては、栗田口物と斷定するもの少なからず。是れ特に注意を要する點なり。

本朝鍛冶考に曰く、按ずるに吉光と銘し、中心の峰角、或ひは小肉或ひは圓く、先は片山形、栗尻、鑪は小筋違等の物世に多し。皆藤四郎作なるとして賞玩す。殊に栗田口吉光を模して贋たるものも亦多し。當國の父子二代の作となすもの世にありといへども、眞贋は、

其の物に備はりあること察知すべし云々と。

吉光の中心は、既に前記のごとしと雖も、銘に種々あり、表に梵字を彫り、其の下部に吉光、裏に口治元年三月日と打てるとのあり。其の治字の上の缺字は、恐くは德字ならん。

其の他、吉忠、實忠、吉抹等の作は、初代吉光に劣れども、左までいやしき作にあらず。爲遠、近房、宗國、兼氏、包永、義胤、則房國安、行正、國重等の治工ありといへども、其の作の世に傳はるもの稀なれば、これが如何を說くこと能はず。

第十編　西海道鍛冶

◎筑前國

◎西蓮

西蓮は、法號にして實名は國吉なり。實阿の父にて、文應頃の鍛工なり。刀の姿幅廣く、鎬は少し廣き方なり。棟種々ありて丸棟もなきにあらず。然れども最も稀なりと云ふ。大概樋を掻くもの多し、而して皆淺からざるなり。鍛は正目にして細かに、鐵の味、ねばき心あり。刃は細直刃、稍亂れたるもの等あり。沸誠にこまやかなり而して刃の上ともにはきかけるなり。鋩子は京物に似て丸く、返り淺し、小脇差の造りは反たると、直なるとあり。幅と重は中位にして

間々菖蒲造もなきにあらず。中心は肉棟にして鑢目は大筋違、先は栗尻なり。銘は、西蓮、國吉又は筑前國博多談議所國吉法師西蓮と打ちたるものあり。

◎實阿

實阿は、西蓮の子にして正應頃の鍛工なり。太刀姿稍細くして小切先なり。丸棟のものもあり。概ね樋を掻けり。鍛は板目にして細かなれども、沈みて見ゆるなり。刃は直刃及び小亂れもあり。刃の上は木工立ちたり。其の他の點に至りては、大體西蓮の作を見るがごとし。然れども稍劣等に屬す。小脇差の造りは、反たるもあり、又直なるもあり。幅、重ねとも中位にして、菖蒲造りもなきにあらず鋩子は丸し。中心は肉棟にして横鑢多く、先は栗尻にして細し。銘には、實阿、實阿作、嘉暦二年十一月日實阿作等のものなり。

◉左

左は、筑前隱岐の濱の鍛工にして、實阿の子、正宗の弟子なり。刀姿幅あり、鎬高く、多くは樋を掻けり。庵深く、棟の造り種々あり鍛板目にして肌こまやかに、如何にも麗しきものとす。而して其の切先の伸びたるもの多きがごとし。双は、のたれ亂れにして其の先尖りて逆心あり。沸粗くして多し。鋩子は、尖りて返り深し。よく沸ゐ、且つ亂るゝなり。左の鋩子は、一流派をなし、二重に成りたる心あるがごとし。彫物あるものもなきにあらずといへども、概ね無きもの多し。小脇差の造りは反りたるもの多し。然れども間々直なるものなきにあらず。其の差小なるものあり双大なるもあり。重ね中にして、間々直双のものあり。肌こまやかにして美し。鍛板目にして肌の見ゐざるもなきにあらず。中心は肉棟にして鑢目は大筋

違、先は細くして栗尻なり。銘は、左、筑州住左、又表裏ともにこれを打つものあり。其の文字は吉光の筆法なり。隱銘を源慶と云ふ法號なり、これを打ちしものもなきにあらず。

◉安吉

安吉は、左の子にして初め筑前に住したりしが、後年長門に移りて冶刀の業に從へり、刀の姿は、父の作と同じ。地鐵は、一層細かに青く、沸こまやかに、匂ひ深く鋩子は細く昇りて尖れり。小脇差の造りは、反りて幅中位、庵深く三つ棟もあり。地肌麗しきものなりといへども左程勝れたるものにあらずと云ふ。ふくらは輕くして寸の伸び過ぎたるものもなきにあらず。亂双にして小ぐのめ風に丸し沸あるもありて、地へ亂れ入りしものもあり。中心肉棟にして鑢目は大筋違、先細くして栗尻なり。刀の鑢目は、平を筋違となし、鎬

を横になしたるもあり。銘は、左の一字を打ちたるもの多し。又左應永十七年正月廿日、筑州住源左、表てに筑州住、裏に左と打ちたるもの等あり。後年長州にての作は、甚だ劣れりと云ふ。

◎吉貞

吉貞は安吉の子なり。大體の造りは安吉に似たり。大小刀ともにのたれたるもあり。刀は大出來なるもあり。中心はすべて安吉と同じ。

◎貞吉

貞吉は、吉貞の弟なり。其の作の大體は、安吉と異ならず。

◎盛高

盛高は、金剛兵衛と號す。文應頃の鍛工なり。同銘三代あり。初代最も良工なり。其の太刀姿、反高く鎬狹く、庵深くして三つ棟もあり。幅、重ねともに丈夫に見ゆ。地又ともに細き木工肌ありて、鋩子丸く、返り深し。小切先、中直又、又細きものもあり。沸のあるものもあれば又沸ねざるものもあり。又打のけあるもあり。小亂又もなきにあらずといへども頗る稀なり。匂ひなくして鍛いやし。其の大體は、二王の初代に似たるもの多し。小脇差の造りは直にして幅、重ねともに中位なり。其の他は太刀の作と異ならず。中心は角棟にして横鑢、先甚だ太く劍形の尖れるもの少なからざるなり。銘は二字のもの多し。二代目は、二字の上に、源の一字を冠せしものなりと云ふ。

◎國弘

國弘は、貞和頃の鍛工にして、左の末葉なり。刀、小脇差ともに、其の作左に似たるもの多し。鍛板目にして樋を掻きたるもの多し。又は、亂又、皆燒あり。ともに能く沸ねたり。又直又、大亂又あり

小出來なるもなきにあらず。鋩子は尖りたると、丸きものとありていづれも返り深し。而して切先の伸びたるもの少なからず。中心は横鑪、筋違鑪の二種ありて小肉棟、先は栗尻なり。銘は筑州住國弘と打てり。又國弘作としたるもあり。是は甚だ稀なりと云ふ。建武の頃より安齋に移りたりと云ふ。

◉筑後國

◉典太

三池の元祖正世は、和銅中にして光世が父ともいへり。典太は法號にして元直と稱す。刀の姿幅廣く、鎬亦廣くして、重ねの薄き方なり。大概皆樋を掻く。然れども幅廣くして淺きもの多し。又間々幅の狹きものなきにあらずといへども、甚だ稀なり。棟は、種々ありて丸きもあり。小切先にして鍛は板目、肌如何にも細かなり。又梨子肌のごとく見ゆるもありて、甚だ麗し。恰も粟田口物のごとき風情あり。又は、直又、小亂又、及び直及に少しづつ足の入りたるがごとくに亂れたるもあり。又稀には、大出來に亂れたるものもなきにあらず。鋩子は丸くして京物若くは千手院行信に似たり。細かに沸ゐるもあり。又三池物と稱するものゝ中に就き、古きは甚だ品位あり。中頃の作は、西蓮、延壽等に似たるもあり。末の作に至りては、備前物若くは高田物等に酷似して、亂るゝもあり。小脇差の造りは直にして、幅、重ともに種々あり。中脇差もありて其の模樣は刀に於けると異ならず。中心は肉棟にして横鑪、先は栗尻なり。三池物の鑪目は、古きはひがき鑪もあり。其の他、筋違、小筋違、大筋違もあり。銘は種々ありて、典太、典太作、三池住典太等と打て

り。又無銘のものにして平作あり。伯耆の安綱の作に類し、甚だ麗しきものあり。

◉豐前國

◉神息

神息は、和銅頃豐前に住し、宇佐八幡宮の社僧にして、冶刀の術を好み、鍛錬したる所のものなりと云ふ。故に冶工にあらず。其の太刀姿かれたり。重ね厚く、鎬狹し。多くは丸棟にして好んで樋を掻けり。鍛板目如何にも細かにして地色光あり。沸甚だ細かなり。又は、概ね細直又に、少しづゝ足の入りたるものなり。間々亂又もなきにあらずと云ふ。小脇差の造りは直なり。中心は丸棟にして鑪目は、横にして下しく下れり。先は栗尻なり。二字銘にして鑚太し。

又寶幢神息とも打てるあり。隱銘は千秋萬歳と打てり。但し千秋萬歳の隱銘は、行平、長圓等もこれを打てり。

本朝鍛冶考に曰く、神息又神足にも作ると云へり。數品見るところ、正しきものと見ねず。家藏の中心圖一品ありて、其の作の趣意未だ詳かならず。只云ふ、三池の肌あるものと、或ひは云ふ、其の肌は、雨の柳に似たりと。又伯耆の安綱風情ありとも云ふ。或ひは云ふ孝謙天皇の御宇、天平勝寶の作と、平城天皇御宇、大同の作を見る。元明天皇の御宇、和銅中の人にて、百餘歳長壽の人と云ふこと宜なりと云ふ。世に云ふ、平城天皇第七の皇子の御守刀は、長銘にして宇佐八幡宮神息とあり。和銅より大同までは百餘年なり。世に長壽の人と云ふは强もべからずと云へり。彼の宮記を合せ考ふべし。神來、神息、寶幢皆同人か、數代異人あり

しか、怪むべき哉。

是に由りて之れを觀れば、神息の事は、邈として考證しがたきものに似たり。姑く疑を存して、茲にこれを揭ぐるのみ。

◎定秀

定秀は、彦山の學頭、賢正坊、或ひは賢聖坊又は源正房と云ふ。其の太刀姿長くして細く、小切先にして鍛板目甚だ細かなり。地肌如何にも細かにしてきらめき、甚だ麗し。概ね淺き樋あり。又は、細直又のもの多しといへども、少しく足を燒入れたるものあり。沸多くしていさみ、匂ひ深く、砂流し、稻妻のごときもあり。又色沈みて、其の燒さかひの判然と見別けがたきもあり。彫物は紀新太夫の姿に能く似たり。鎚子はゝきかけるなり。中心棟丸く、筋違鑢にして先細し。銘は、二字もあり。又豐後國僧定秀、又は僧定秀と打ち

たるもあり。彦山は、豐前の山たりといへども、豐後國僧定秀と銘するは、生國豐後の人なるか。又行平師弟の故を以て、豐後僧となすか、其の故未だ詳かならず。

其の他有平、守重、行眞、安光、正恒、家重等の冶工ありといへども、其の作甚だ少なし。故にこれが如何を記述すること能はず。

◎豐後國

◎行平

行平は、建仁頃の鍛工にして、番鍛冶二十四人の一人なり。紀新太夫と號す。太刀刀の姿細く、切先つまりて、鎬狹く、庵深し、三つ棟もあり。鍛正目こまやかにして地色黑く、少しく煤けたるが如くにて、淡紫の心なる肌あり。又は、直又、少しのたれ小亂及び地に

玉多きもあり。沸なくして匂ひ深し。又細かに沸ゐたるもあり。鋩子は燒きつめたるもの多し。此の作の他と大に異なる點は、鋒元の双を一寸ばかり上にて燒き落したること是なり。小脇差の造りは、直なるも反たるもあり。幅、重は、中小の間に位すべし。大小とも に櫃の内に、かりくらを彫る。長みじかくして角なき樣に彫るは、此の工の手癖と思はるゝなり。大まはりを深く彫り、姿を請て、淺く彫るを以て、消殘りたる彫物、外の作に異なる姿なり。劍、梵字浮劍等あり。中心は、双の方丸く、平及び肉あり。鑪目は、大筋違中筋違、小筋違、鏟鋤等あり。先は格別に細く、栗尻なり。銘は、豐後國行平作、紀新太夫行平等打てり。隱銘は、方士、有風、宗安宗秀等あり。小脇差には、二字銘のものもあり。此の作は、燒直しに紛るゝものあり。

◎正恒

正恒は、行平の弟子にして天福頃の刀工なり。紀正恒と云ふ。太刀刀の姿細く、小切先にして庵淺し。樋は稀なり。鍛目は、何れとも見別けがたき程細かにして、正目の心なり。地色黑くして少しく煤けたるがごとし。淡紫の肌甚だ麗し。双は種々ありて、直双に小足の入りたるもの、のたれ心に亂れたるもの、大出來なるもの、小丁子の交りたる亂双もあり。沸のあるもあり、又無きもあり。鋩子は丸し。恰も行平に似たる鍛なり。中心の棟は肉棟にして鑪目は、横勝手下りなり。先は栗尻にして稍細し。銘は二字のもの多し。

◎平長盛

長盛は、豐後高田の刀工なり。應永の頃とす。鎬高く、ふんばり强く、鍛は正目の心なり。双は、直双、亂双、又沸ゐたるもあり。鋩

子は丸く、彫物は細かにしてぬるし。中心棟丸く、横鑪にして先細き栗尻なり。

其の他末の作に平高田といへるあり。高田の一類なり。いづれも鍛あしく、地色黒く、肌いやしく種々の造りあり。大中小、菖蒲造り等一様ならず。姿、反、鎬大中小いづれも皆同じからず。刃は直刃鼠足の入りたるもの、刃大ぐのめに亂れたるもの等あり。いづれも其の焼刃は、位劣りいやしきもの多し。鋩子のごときも種々ありといへども善からず。中心は角棟にして横鑪。先は細くして栗尻なり。

高田鍛冶は、友光、友行を始とす。思ふに安光、安則等の末流ならんか。平姓長盛以下數十人、應安康永の頃より天文、永祿、天正に至て、これが佩刀となすべきもの甚だ多く、藤姓の貞行、統行、義行、實行等のごときは、同銘數代ありて、天文、弘治、永祿の工多く、其の子孫にして慶長前後のものは、後に記載する所の新刀の部にも見えたり。金剛兵衛の末、此の國に住するもの數十人ありと云ふ。

◉能定

能定は、應安頃の鍛工にして、京師の了戒の弟子なり。故に筑紫了戒の稱あり。太刀姿幅ありて庵淺く、肌は京師の了戒作に似たり。刃は小亂刃、直刃等ありて、鋩子は焼きつめたり。沸は稀なり。彫物に梵字多し。中心の棟は肉棟にして横鑪、先は栗尻なり。銘に了戒能定と打てり。

◉長圓

長圓は、大和、筑前、筑後、陸奥及び豊後に同名あり。皆其の人を同じくす。其の作三條小鍛冶宗近に似て、三池の肌あり。鋩子は大

和物に類して巧なり。

◎肥前國

肥前には名工巨匠とも稱すべきものなし。其の名の世に知られたるは、末秀、末貞、末久、貞秀、治吉、光恒、重貞、重延、有國、重則、貞清、國進、盛高、盛次、氏成、貞宗、國助、久保、國久等の治工あり。國久は、伊賀守道秀の父にして天文頃の人なり。其の作の如何は、後編圖說に就いて見るべし。

◎肥後國

◎延壽

延壽弘村は、本國は大和にして、京師の來國俊の妹婿なり。其の子國村、延壽太郎と號す、或ひは菊池來とも云へり。太刀姿細く、鎬少しく廣く、庵深く、三つ棟もあり。樋を掻きたるもあり。小切先にして、鍛は正目なり。刃は、直刃、直刃に鼠足の入りたる、小ぐのめの交りたる、少しく亂れたるもの等あり。然れども直刃は、其の最も得意とする所なり。沸細かに、匂ひ深し。地肌締りて鋩子は丸く、返りは少しく深き方なり。小脇差は、造り直にして幅種々あり重ねよく、直刃にして鋩子は丸し。其の他の點に至りては刀と異ならず。中心肉棟にして棟鑢、先は栗尻なり。銘は鑽太し。

◎國吉及び其の他

延壽の一族にして國吉、國時、國綱、國光、國泰、國信、國正、國經、國友、國房、國資、及び國宗等の治工あり。其の作、大概國村に似たり。國吉の作は、小ぐのめのもの多く、國資、國綱は、小脇

差の造り、反たるものもあり。又のたれ又もあり、前にも述ぶるがごとく、來より分岐したる冶工なれば、其の作大概來に似たり。又間々板目肌のものもあり。中心は、大抵角棟のもの多く、又小肉棟のものもなきにあらず。鑢目は、横及び筋違のもの多し。先は大概栗尻なり。銘は二字のものあり、又肥州菊池住と冠せるものありて一樣ならず。

正平中、肥後の菊池氏、勤王の聞ゑ高く、武勇の譽隱れなかりしが弘村父子は、大和にありて此の事を聞き、遂に此の國に來れりと云ふ。或ひは關西將軍に供奉して來りしなりと云ふ。又一說に依れば菊池氏の招に應じて來りしものなりと云ふ。未だ孰れか其の眞僞を確むること能はずといへども、一門數十人、永正、天文の後も、末流最も多く、系圖に示したるところの外、猶數百人あり。石貫、同

田貫一門亦甚だ多し。同田貫は、上野介左馬介治兵衛又八左衛門、源左門衛、兵部等は天文前後にして、淸國、正國は文祿の頃なり。殊に景介、源左衛門作のごときは、其の鍛冶の狀偉大にして、銘は肥後國玉名郡石貫景介と打ち、九州肥後國同田貫源左衛門と打つがごとく、いづれも皆長銘なり。尙ほ其の圖說は、後編記す所に依りて見るべし。

◉日向國

日向國は、上古皇孫降臨の地にして、神武天皇の御宇、天津眞浦より上代の鍛部多かるべきは、推して知るべきなり。降つて後一條天皇の御宇、筑後の國の月西、來り住し、其の子貞行等あり。粟田口久國の門人久吉、大隅と此の國に住して冶刀の業に從ひたりと云ふ

又、吉人、兼次、兼重、通吉、盛尙、源貞、家隆、國廣、實正、久次、光重、秀吉、實忠、兼榮、國吉、實昌等、皆應永の頃より天正文祿中、薩摩、大隅の間を往來し。當國に於いて治刀の業をなしたりと云ふ。然れども、其の詳かなることは得て考ふべからず。

◎大隅國

栗田口國友の子に、久國なるものあり。大隅に來たりて治工となれり。次で久吉、重包、重鑑、重近、儀重、末次、宗成、右任、貞清等の刀工ありて、日向、大隅の間を往來し、以て其の業に從事せりと云ふ。

◎薩摩國

◎正國

正國は波平の刀工なり。波平は、文保の頃より數代ありて、正國最も秀でたり。太刀姿幅ありて反高く、地鐵青黑く、板目鍛にして大木工肌なり。匂ひ深く、沸細かなり。伯耆の安綱の位卑きがごとく保壽の風情もありて、直燒及多し。小脇差の造り種々ありて、幅、重ねとも一樣ならず。三つ棟、庵棟、丸棟等あり。直又、鼠足の入りたるもの、小亂の交りたるもの等の燒及あり。沸は、有るもあり又無きもあり。鋩子は丸し。彫物は、劍、鋒等あり。又末の備前物のごときもあり。或ひは三原、若くは金剛兵衛等のごとく、直又に似たるものもあり。匂ひなく、鐵あしく肌多くありていやし。中心棟は、丸きと角なるとあり。鑢目は、横、筋違及びひがき等の類あり。先は栗尻なり。

◉行仁

行仁と行光と同人なり。其の作大概正國に似たり。大略廣き樋あり直双及び小亂双の名工なり。

◉行安

行安は、波平の刀工なり。刀姿細く、最も善く鍛造したるものは、鐵締りたれども、來國俊の位なきものに似たり。其の他清左、重吉、安滿、行滿、安俊、助近等の冶工あり。清左、重吉は、亂双多く、横鑪なり。安滿は亂双の名手、行滿、安俊は直双の名工なり。助近は、國近とも銘を打ち、波平の元祖なりと云ふ說多し。抑も波平の一門頗る多く、新古を通じて數百千工、いづれも優劣あるは勿論なりといへども、これを大別するときは、三段となるべし

即ち其の一は、正國、行安、行等よりして助近、行久、安滿のごときは正國の風情殘れり。其の二は南朝正平中、應永、文明、永正前後にして備前の其の當時の作に成れるものに双文、鍛ともに、これに依りたるものゝごとく、其の三は永正後にして、其の鍛造したるところのものを見るに、多くは長谷部國重の沸に似て卑しく、地鐵は、麗しき部分を失ふがごときもの多し。然れども、鍛冶の術、諸國ともに大に衰へ、應仁より天正の間は、僅々數十人に過ぎずといへども、其の取るべきものに至つては、備前、關及び波平の一族にあるのみ。殊に應永前後は、備前刀に似たるものを以て、勝れたるものとなしたるが。正國の子、行安以下の六人は、後同銘多く、系圖に就いてこれを見るに、甚だ疑はしきものなきにあらず。今古書の揭ぐるところに依りて、其の如何を究めんと欲し、種々考證した

りと雖も、益々疑はしく、これが如何を斷定すべき資料に乏し。讀者これを諒とせよ。

正誤表

第四編

頁	行	誤	正
四十三		爲繼は以下十八字除く	爲繼は關の住四郎兵衛と云ふ越中とは同銘異人也

第五編

頁	行	誤	正
二十三	一	くに	刄に
二十三	五	足の彫物なり	箸の彫物あり
三十	十三	相州物	備前物
三十一	五	貞景	眞景
三十一	八	利重の項三行取消す	

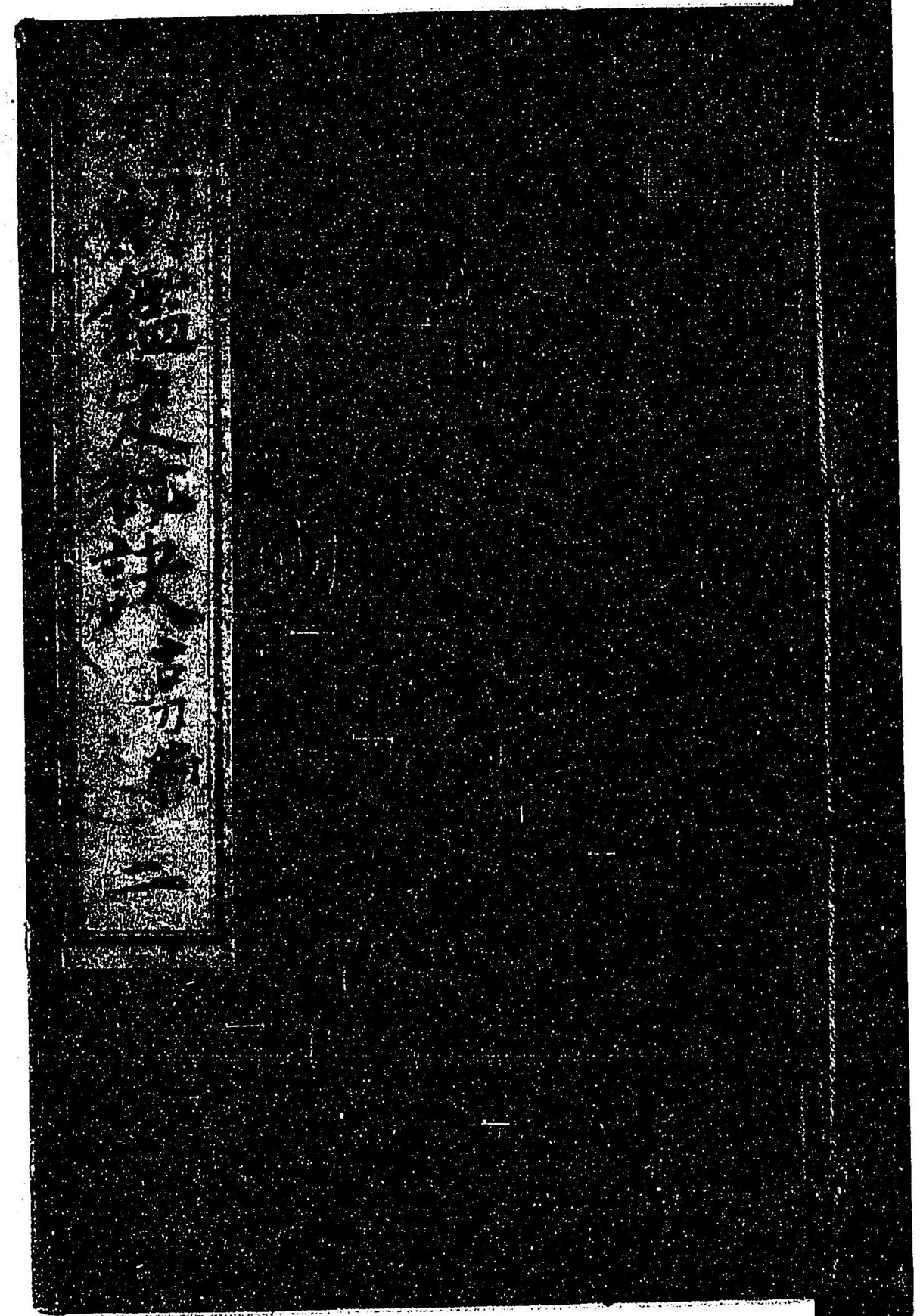
第六編

頁	行	誤	正
四十	十	小切先まで搔き通して	小鋒先まで搔き上せて
五十一	八	一文字の銘	同則宗の銘
五十七	一	鎬の内に	鎬の平に
七十	十	長船の刀匠にして正應頃の人なり	光忠の子にして同銘二代あり
七十一	八	弟にして	門人にて
七十二	四	慶長頃	正安頃
七十九	十一	正宗の	貞宗の

第七編

頁	行	誤	正
六十	下足		鋒元

第十編

頁	行	誤	正
五十三		元直	元眞

67
10
274